第四篇

第一章　立法權

第一條　皇帝元老院及代議士院合同シテ立法ノ權ヲ行フ

第二條　皇帝ハ法律ヲ兩院ニ下附ス兩院モ亦意見書ヲ上奏スルコトヲ得而シテ其批准ヲ得ル者ヲ法按トス

第三條　各法律ハ兩院協同ノ後皇帝ノ批准ヲ得ルニ非レバ法律ト爲スコトヲ得ズ

第四條　法律中ノ疑義ヲ釋シテ全國ノ定例ト爲ス者ハ仍ホ立法權內ノ事トス

第二章　元老院及其權利

第一條　元老院議官ハ皇帝之ヲ左ニ記スル處ノ人ヨリ選ム

一、皇族

一、華族

一、嘗テ勅任官ノ位置ニ在ル者

一、功勞アル者

一、學識アル者

第二條　皇子ハ滿十八才ニシテ元老院議官ト爲ルノ權ヲ有シ議官ノ上席ニ坐ス滿二十才ニ始メテ公議ニ參ス

第三條　元老院議長及副議長ハ皇帝之ヲ議官中ヨリ選ブ

第四條　元老院ハ立法ノ事ヲ掌ルノ外上言書ノ立法ノ事ニ係ル者ヲ受ク

第五條　議官ハ犯罪ノ故及其請願ニ由ルニ非レハ之ヲ免ズルコトヲ得ズ

第三章　代議士院及其權利

第一條　代議士ハ法律ノ定ムル所ノ選擧規程ニ由テ之ヲ選ブ

第二條　代議士ハ任期ヲ四年トシ每二年ニ其全數ノ半ヲ改選ス

第三條　代議士院會期ノ間議長副議長各三人ヲ公選シ其氏名表ヲ奏進シ而シテ皇帝之ヲ選ブ

第四條　代議士ハ法律ニ定ムル所ノ費額ヲ受ク

第四章　兩院通則

第一條　兩院ハ過半數ノ會員アルニアラザレバ何事ヲモ議スルコトヲ得ズ

第二條　兩院ノ會議ハ過半數ヲ以テ之ヲ決ス

第三條　法案ハ必ラズ三回ノ會議ヲ經

第四條　兩院ノ會議ハ公行ノ者トス但議長若クハ議員五人以上公行スルコトヲ欲セズ而シテ過半數之ヲ可トスルトキハ公行ヲ停ムルコトヲ得

第五條　議員ハ在場發言ノ故ヲ以テ審糾ヲ受ルコトヲ得ズ但シ各院ノ規則ニ遵フ

第六條　兩院會期ノ間議員現行犯アルニ非レバ之ヲ拘引拿捕スルコトヲ得ズ

第七條　何人モ兩院ノ議員ヲ兼任スルコトヲ得ズ

第八條　兩院ハ大臣參議諸省卿及長官ノ臨場ヲ求ムルコトヲ得而シテ大臣參議諸省卿及長官ハ常ニ兩院ニ至リ其意見ヲ述ルコトヲ得但シ其決議ノ數ニ在ラズ

第九條　兩院ハ大臣參議諸省卿及長官ノ罪職務ニ係ル者ヲ劾スルコトヲ得

第十條　兩院俱ニ開カザルノ時ニ方リ一院法案ヲ議定スルトキハ他ノ一院ノ開クル日ヲ待テ之ヲ報告ス

第十一條　法案既ニ一院ノ議定ヲ經ルトキハ之ヲ他院ニ送ル他院若シ之ヲ變更スルトキハ又之ヲ前ニ議定スル所ノ院ニ返ス前ニ議定スル所ノ院又之ヲ變更スルトキハ又之ヲ他院ニ送ル兩院竟ニ協同セザルトキハ各院同數ノ委員ヲ出シ一ノ報告書ヲ作リ各院之ニ據リ自ラ其可否ヲ決ス

第五篇　行政權

第一條　皇帝ハ諸省ヲ置キ大臣參議諸省卿及長官ヲ命ジ又之ヲ免ズ

第二條　大臣參議諸省卿及長官ハ各其職務ノ責ニ任ズ法律及皇帝ノ命令ハ責任アル者ヲシテ之ニ副署セシム

第三條　大臣參議諸省卿及長官ハ國憲ヲ遵守スルコトヲ誓フ

第六篇　司法權

第一條　司法權ハ各裁判所ニ由リテ之ヲ行フ各裁判所ハ只法律ニ遵フ他ノ命ヲ受ケズ

第二條　裁判所ノ設置及權利ハ法律ノ定ムル所トス法律ニ揭グル所ノ常規ニ由ルニ非レバ特ニ裁判所ヲ設クルコトヲ得ズ

第三條　陸海軍裁判所ハ別ニ法律ヲ用ユ

第四條　國中ニ大審院一所ヲ置ク

第五條　大審院ノ職務ハ法律ニ揭グル所ヲ除クノ外兩院効スル處ノ大臣參議諸省卿及長官ノ罪職務ニ係ル者ヲ裁判ス

第六條　判事ハ犯罪ノ故及其請願ニ由ルニ非レバ之ヲ免ズルコトヲ得ズ

第七條　裁判所ノ裁判ハ民事刑事ヲ分タズ公行トス但事ノ國安及風儀ニ係ル者ハ公行ヲ停ムルコトヲ得

第八條　裁判ハ必ラズ理由ヲ付ス

第七篇　府縣會及區町村會

第一條　每府縣ニ府縣會ヲ置キ每區町村ニ區町村會ヲ置ク其選擧規程ハ法律ノ定ムル所トス

第二條　府縣會及區町村會ノ權利義務ハ亦法律ノ定ムル所トス

第八篇　國費

第一條　政府ハ每年次年ノ國費計算表及國費ヲ支ユ可キ意見書ヲ兩院ニ送リ又租稅徵收及費用ノ報告書ヲ送リ以テ其檢查及承認ヲ得但此事ハ先ヅ代議士院ノ議決ヲ經

第二條　租稅ハ法律ノ許ス所ノ者ニ非レバ之ヲ賦課スルコトヲ得ズ

第三條　事ノ租稅ニ係ルハ漫ニ特准ヲ與フルコトヲ得ズ

第四條　國債ハ法律ノ許ス所ニ非ザレバ之ヲ募ルコトヲ得ズ政府ヨリ債主ニ對スルノ義務ハ犯ス可カラズ

第五條　貨幣ノ斤量品性價値法紙幣發行ノ額ハ法律之ヲ定ム

第九篇　國憲修正

第一條　若シ國憲中修正ヲ要スル者アリテ果シテ已ムコトヲ得ザルヲ見ルトキハ立法權之ヲ宣告ス

第二條　國憲ノ修正ヲ議スルハ兩院ノ議員三分二以上相會スルニ非レバ其事ヲ議スルコトヲ得ズ而シテ其事ヲ可トスル者三分二以上ニ上ラザレバ之ヲ變更スルコトヲ得ズ

附錄

第一條　國憲施行ノ日若シ法律ノ之ト牴觸スル者アルトキハ之ヲ廢ス

第二條　國憲施行ノ日ヨリ文武百官ハ忠ヲ皇帝ニ竭シ且ツ國憲ヲ遵守スルコトヲ誓フ

國憲草按各議官意見書

國憲

第一篇

第二篇トナスヲ可トス

皇帝ヲ以テ第一編トシ、帝國ヲ以テ第二編トス、固ヨリ我皇國タル然ラザルヲ得ザルノ由緣アルヲ知ルト雖ドモ、今日此國憲ヲ創立スルニ至テ順序妥當ナルヤ否ヤ、請フ其說明ヲ得ント欲ス。然レドモ試ミニ予ガ思考スル所ヲ陳ゼバ左ノ編條ニ改換遷置シテ體裁妥當ナルニ庶幾ランカ。且帝國一編ノ如キハ其條々自ラ捴則ノ意味アリテ編首ニ揭グベキコト著シキニアラズヤ。

議官　神田　孝平　意見

第一編

帝國

第一條　帝國ノ土地云々日本國トス。

第二條　萬世一系ノ皇統ハ日本國ニ君臨ス。

第三條　立法行政司法ノ三權ニ由テ國ヲ統治ス。

第四條　帝國府縣云々法律ノ定ムル所トス。

第二編

第一章　皇　帝

第一條　萬世一系ノ寶祚ヲ踐タル皇帝ハ神聖ニシテ犯ス可カラズ。

以下順次ニ條數ヲ換フ

議官　福岡　孝弟　意見

第一章　皇　帝

條數ハ初ヨリ終リ迄順序ヲ追ヒ、第一條ヨリ逐次第八十八條マデニ至ル樣改メ度事。

議官　箕作　麒祥　意見

第一條　萬世一系ノ皇統ハ日本國ニ君臨ス。

國憲草按各議官意見書

萬世一系ノ皇統ハ永遠日本國ニ君臨スベシ。

議官　神田　孝平　意見

第二條　皇帝ハ神聖ニシテ犯ス可ラズ。縦ヒ何事ヲ爲スモ其責ニ任ゼズ。
皇帝ハ神聖ニシテ犯ス可カラズ」ト致シ「縦ヒ」以下ハ削除シ度キコト。

議官　箕作　麟祥　意見

皇帝ハ神聖ニシテ犯ス可ラズ。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

皇帝ハ神聖ニシテ犯ス可ラザル者タリ。故ニ臣民其過失ヲ擧グルヲ得ズ。

議官　神田　孝平　意見

皇帝ハ此國憲ヲ以テ當ツ可ラズトス。

但本文原書ニ因タル語ナルベクモ、皇國ハ素ヨリノ義、今更原書ニ泥ムハイカヾ哉。

議官　大久保一翁　意見

第三條　皇帝ハ行政ノ權ヲ統ブ。
第四條トナスヲ可トス。

議官　神田　孝平　意見

第四條　皇帝ハ百官ヲ置キ其黜陟ヲ主トル。
皇帝ハ百官ヲ設ケ之ヲ黜陟ス。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

第五條トナスヲ可トス

議官　神田　孝平　意見

第五條　皇帝ハ兩院議スル所ノ法按ヲ斷ジ、而シテ之ヲ國内ニ布ク。

國憲草按各議官意見書

皇帝ハ兩院議スル所ノ法按ヲ斷定シ、之ヲ國內ニ布告ス。

第三條トナスヲ可トス。

議官　東久世通禧　意見
議官　大給　恒　意見

第六條　皇帝ハ陸海軍ヲ管シ、便宜ニ從テ之ヲ派遣ス、其武官ノ黜陟退老ノ如キハ法律中ニ揭グル所ノ常規ニ遵ヒ而シテ皇帝其奏ヲ可ス。

議官　神田　孝平　意見

皇帝ハ陸海軍ヲ管シ、便宜ニ從ヒテ之ヲ派遣ス。武官ノ黜陟退老ノ如キハ法律中揭グル所ノ常規ニ遵ヒ而シテ皇帝其奏ヲ可ス。

議官　東久世通禧　意見
議官　大給　恒　意見

皇帝ハ陸海軍ヲ管シ便宜ニ從テ之ヲ派遣スルノ權アリ。

議官　神田　孝平　意見

第七條　皇帝ハ外國ト宣戰講和及ビ通商ノ約ヲ立ツ、約內ノ事國帑ヲ費用シ、國疆ヲ變易スルガ如キハ兩院之ヲ認ムルヲ待テ方ニ效アリトス。

第七條ト第八條トノ間ニ左ノ一條ヲ加ヘ度キ事、

第　條　裁判ハ皇帝ノ名ヲ以テ之ヲ宣告ス。

皇帝ハ外國ト宣戰講和及ビ通商ノ約ヲ立ツルノ權アリ、但シ約內ノ事國帑ヲ費用シ、國權ヲ變易スルガ如キハ兩院之ヲ認ルヲ待テ方ニ效アリトス。

議官　箕作　麟祥　意見

第八條　皇帝ハ赦典ヲ行ヒ以テ人ノ罪ヲ減免ス。

皇帝ハ赦罪減刑ヲ行フノ權アリ。

議官　神田　孝平　意見

第九條　皇帝ハ貨幣ヲ造ルノ權アリ。

皇帝ハ貨幣ヲ鑄又ハ之ヲ改造ス。

議官　神田　孝平　意見

第十條　皇帝ハ兩院ノ議員ヲ召集シ、其會期ヲ延シ又其解散ヲ命ズ。
皇帝ハ兩院ノ議員ヲ召集シ、其會期ヲ延シ又ハ代議士院ノ解散ヲ命ズ。

議官　東久世通禧　意見
議官　大給　恒　意見

第十一條　皇帝ハ人ニ貴號及勳章ヲ授ク。
皇帝ハ貴號及ビ勳章ヲ授ク。

議官　東久世通禧　意見
議官　大給　恒　意見

第二章　帝位繼承

第一條　今上皇帝ノ子孫ヲ帝位繼承ノ正統トス。

議官　神田　孝平　意見

第二條　帝位ヲ繼承スル者ハ嫡長ヲ以テ正トス。如シ太子在ラザルトキハ太子男統ノ裔嗣グ。
太子男統ノ裔在ラザルトキハ太子ノ弟若クハ其男統ノ裔嗣グ。太子男統ノ裔渾テ在ラザルトキハ庶出ノ子及ビ其男統ノ裔親疎ノ序ニ由リ入テ嗣グ。

第三條　上ノ定ムル所ニ依リ而シテ猶未ダ帝位ヲ繼承スル者ヲ得ザルトキハ、皇族親疎ノ序ニ由リ、入テ大位ヲ嗣グ、若シ止ムコトヲ得ザルトキハ女統入テ嗣グコトヲ得。
上ノ定ムル所ニ依リ而シテ猶未ダ帝位ヲ繼承スル者ヲ得ザルトキハ、皇族親疎ノ序ニ由リ入テ大位ヲ嗣グ。

議官　東久世禧通　意見
議官　大給　恒　意見

本案各條皆極メテ重大ノ事件ニシテ、其果シテ完全無缺ナルコト容易ニ斷定ス可ラザル者アリ。今其最モ不可ト認取スル者意見左ニ進呈ス。

第一篇　第二章　第三條
上ノ定ムル所ニ依リ而シテ猶未ダ帝位繼承スル者ヲ得ザルトキハ、皇族親疎ノ序ニ由リ入テ大位ヲ嗣グコトヲ得。

國憲草按各議官意見書

末條ニ所謂女統ナル者、皇女他人ニ配シテ擧グル所ノ子若クハ孫ナルトキハ、則現然異姓ナリ。（譬ヘバ仁孝天皇ノ皇女故將軍家茂ニ降嫁スルカ如キ若シ其所在アレバ卽德川氏ニシテ王氏ニアラズ王族ニアラザルナリ）果シテ然ラバ大ニ第一章第一條ニ牴觸ス。如何トナレバ異姓ノ子ニシテ帝位繼承スルコトヲ得バ之ヲ萬世一系ノ皇統ト云可ラズ。故ニ其入嗣ノ文、男統全ク盡キ千萬止ムヲ得ザルノ際ニ備フル者ト雖ドモ、恐ル後來言フ可ラザルノ弊害ヲ生ゼン。因テ朱書ノ如ク修正アランコトヲ希望。

議官　河田　景與　意見

若シ以下ヲ刪除スベシ。

議官　伊丹　重賢　意見

若シ以下二十一字ヲ刪除スベシ。

副議長　佐々木高行　意見

第四條　皇帝卽位ノ禮ヲ行フトキハ兩院ノ議員ヲ召集シ國憲ヲ遵守スル事ヲ誓フ。

第二章　皇帝未成年及攝政

第一條　皇帝ハ滿十八歳ヲ以テ成年トス。

第二條　皇帝未ダ成年ニ屆ラザルトキハ、皇族中皇帝ノ最親ニシテ且滿二十歳以上ノ者政ヲ攝ス。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

第三條　皇帝未ダ成年ニ屆ラズ、而シテ男統ノ皇族滿二十歳以上ノ者在ラザルトキハ、皇太后政ヲ攝ス。

皇帝未ダ成年ニ屆ラズ、而シテ男統ノ皇族滿二十歳以上ノ者在ラザルトキハ、皇太后攝ス、皇太后在ラザルトキハ法律ヲ以テ之ヲ撰任ス。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

第四條　成年ノ皇帝若シ政ヲ親ラスル能ハザルノ狀アルトキハ、亦攝政ヲ置ク、此時太子年滿十八歲以上ナルトキハ太子政ヲ攝ス。

第五條　攝政在職ノ初兩院ノ議員ヲ召集シ忠ヲ皇帝ニ竭シ、且ツ國憲ヲ遵守スルコトヲ誓フ。

第四章　皇室經費

第一條　皇帝及皇族歲入ノ額ハ法律ノ定ムル所トス。

第二條　皇居及離宮新築重修ノ費ハ國庫ヨリ支給ス、其費額ノ如キハ法律ノ定ムル所トス。

第三條　皇后寡居シ若クハ太子滿十八歲ナルトキハ別ニ歲入ノ額ヲ定ム、太子妃ヲ納ムルトキハ其額ヲ增ス、此等ノ費額亦法律ノ定ムル所トス。

第二編

第一編トナスヲ可トス

議官　神田　孝平　意見

帝國

國疆トナスヲ可トス。

第一條　帝國ノ土地疆域內ニ在ル者ヲ日本國トス。
凡我ガ帝國ノ土地疆域內ニ在ル者ヲ日本國トス。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

此ノ第二篇中ノ第一條第二條共ニ第一篇ノ前ニ入レ、第二篇ヲ第一篇トシ、第一篇ヲ第二篇トシ度事。

議官　箕作　麟祥　意見

帝國日本ハ五畿八道及附屬ノ諸島ヲ統轄ス。

國憲草按各議官意見書

第二條　帝國內ヲ分テ三府三十六縣一使トシ、府縣內ヲ分テ郡區トシ、郡區內ヲ分テ町村トス。

第三條　帝國府縣郡區町村ノ疆界ヲ變易スルハ法律ノ定ムル所トス。

議官　神田　孝平　意見

第三條　府縣郡區町村ノ疆界ヲ變易スルハ法律ノ定ムル所トス。

帝國府縣區町村ノ疆界ヲ變更スルハ法律ノ定ムル所トス。

議官　神田　孝平　意見

第三編

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

第一條　日本國民ハ皆其權利ヲ享ク、其何ヲ以テ之ヲ有チ何ヲ以テ之ヲ失フガ如キハ皆法律ノ定ムル所トス。

日本國民タル身分幷其權利ハ皆ナ法律ノ定ムル所トス。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

此第一條ノ前ニ別ニ左ノ一條ヲ加ヘ度事。

第　條　日本國民タルノ分限ハ法律ニ揭グル所ノ常規ニ由リ之ヲ得及之ヲ失フ者トス。

議官　箕作　麟祥　意見

第二條　國民ハ法律內ニ在テ均平ナル者トス。

國民ハ法律內ニ在テ平等ナル者トス。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

第三條　內外國民ノ身體財産ハ齊シク保護ヲ受ク、但外國人ノ爲メニ特例ヲ設ケタル者ハ此限ニ在ラズ。

國民ノ身體財産ハ齊シク保護ヲ受ク。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

第三條ハ內外國民ヲ論ゼズ、凡帝國ニ在居スル人民ハ其身體財産ノ保護ヲ受ク、但シ其外國人ノ爲メニ特例アル者ハ此限ニアラズトノ意ナルヤ稍不明ナラン。

議官　福岡　孝弟　意見

第四條　國民ハ皆文武ノ官職ニ任ズルコトヲ得。

第五條　國民ハ租稅ヲ納ムルノ義務ヲ負フ。

第六條　國民ハ兵役ニ應ズルノ義務ヲ負フ。

第七條　國民自由ノ權ハ犯ス可カラズ、法律ニ揭グル所ノ常規ニ依ルニ非レバ拘引拿捕若クハ囚禁等ノ事ヲ行フコトヲ得ズ。

國民ノ自由ハ法律之ヲ保護ス、法律ニ由ルニ非レバ拘引拿捕若クハ囚禁等ノ事ヲ行フコトヲ禁ズ。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

第八條　國民遷居ノ自由ハ法律ニ由ルニ非レバ限制スルコトヲ得ズ。

國民遷居ノ自由ハ犯スベカラズ。法律ニ由ルニ非レバ制限スルコトヲ得ズ。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

第九條　國民ノ住居ハ犯ス可カラズ、法律ニ揭グル所ノ常規ニ由ルニ非レバ人家ニ入リ搜索ス

ルコトヲ得ズ。

國民ノ住居ハ犯ス可ラズ。法律ニ掲グル所ノ常規ニ由ルニ非レバ人家ニ入リ捜索スルコトヲ得ズ。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

國民ノ住居ハ犯ス可ラズ。法律ニ掲グル所ノ常規ニ由ルニ非レバ戸主ノ意ニ反シテ人家ニ入ルコトヲ得ズ。

議官　神田　孝平　意見

第十條　國民ノ財産ハ犯ス可ラズ、法律ニ掲グル處ノ常規ニ由ルニ非レバ其所有ヲ奪フコトヲ得ズ。

國民ノ財産ハ犯ス可ラズ。法律ニ由ルニ非レバ其所有ヲ奪フコトヲ得ズ。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

國民ノ財産ハ犯ス可ラズ、法律ニ掲グル所ノ常規ニ由ルニ非レバ之ヲ奪フコトヲ得ズ。

議官　神田　孝平　意見

第十一條　書信ノ祕密ハ犯ス可ラズ、法律ニ掲グル所ノ常規ニ由ルニ非レバ之ヲ拘收スルコトヲ得ズ。

書信ノ祕密ハ犯ス可カラズ、法律ニ由ルニ非レバ拘收スルコトヲ得ズ。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

書信ノ祕密ハ犯ス可ラズ、法律ニ掲グル所ノ常規ニ由ルニ非レバ開緘スルコトヲ得ズ。

議官　神田　孝平　意見

第十二條　國民ハ言語文字及ビ印板ニ由リ、以テ其意思論說ヲ世ニ公ニスルコトヲ得、但法律ニ依遵セザルコトヲ得ズ。

第十三條　國民ハ各其宗教ヲ崇信スルコトヲ得、其政事風俗ニ害アル者ハ均シク禁ズル所トス。

第十四條　國民ハ集會團結ノ權アリ、但其制限ハ法律ノ定ムル所トス。

第十五條　國民ハ各自上言スルコトヲ得、如シ二人以上上言スル時ハ須ク各其名ヲ署スベシ。
但シ官准ノ會社其會社ノ事ヲ上言スルハ二人以上仍ホ一人ノ名ヲ用ユル事ヲ得。
本條ハ「各自上言スルコトヲ得」ノミニテ止メ、「如シ」以下ハ餘リ些細ノ事故削除シ度事。

議官　箕作　麟祥　意見

第十六條　國民ハ皇帝ノ批准ヲ得ルニ非レバ外國ノ貴號勳章及養老金ヲ受クルコトヲ得ズ。
本條ハ外國ノ下ニ官職ノ二字ヲ加ヘ度事。

議官　箕作　麟祥　意見

第十七條　內亂外患ノ時ニ方リ、國安ヲ保ツガ爲メ帝國ノ全部或ハ幾部ニ於テ暫ク國憲中ノ諸

款ヲ停ムルコトヲ得。

第四編

第一章　立法權

第一條　皇帝元老院及代議士院合同シテ立法ノ權ヲ行フ。
皇帝元老院及代議士院合同シテ立法ノ權ヲ有ス。

議官　神田　孝平　意見

第二條　皇帝ハ法案ヲ兩院ニ下付ス、兩院モ亦意見書ヲ上奏スルコトヲ得、而シテ其批准ヲ得ル者ヲ法按トス。
此ニ至テ兩院ノ起草起議ヲ意見書トノミ謂フテ適當ナルヤ、蓋シ此第一條第二條ハ立法權ノ因據スル所尤モ審議セザルベケンヤ。

議官　福岡　孝弟　意見

皇帝ハ法案ヲ兩院ニ下付ス、兩院モ亦意見書ヲ上奏スルコトヲ得、而シテ皇帝ノ批准ヲ得ル者ヲ法按トス。

國憲草按各議官意見書

第三條　各法案ハ兩院協同ノ後皇帝ノ批准ヲ得ルニ非レバ法律ト爲スコトヲ得ズ。
凡法案ヲ兩院協議ノ後皇帝ノ批准ヲ得ルニ非レバ法律ト爲スコトヲ得ズ。

議官　神田　孝平　意見

第四條　法律中ノ疑義ヲ釋シテ全國ノ定例ト爲ス者ハ仍ホ立法權内ノ事トス。

第二章　元老院及其權利

第一條　元老院議官ハ皇帝之ヲ左ニ記スル所ノ人ヨリ選ム。

一、皇族
一、華族
一、嘗テ勅任官ノ位置ニ在ル者
一、功勞アル者
一、學識アル者

元老院議官ハ齢三十歳ニシテ左ニ記スル所ノ人ヨリ皇帝之ヲ特選ス。

一、皇族
一、華族
一、勅任官及嘗テ其位置ニ在リシ者
一、功勞アル者
一、學識アル者

議官　東久世通禧　意見
議官　大給　恒　意見

第二章第三章共ニ及其權利ノ題字アリ、然ルニ其條款中權利ニ適當スル者ヲ見ズ、却テ通則中ニ權利ト指スベキモノヲ見ルノミ、今此四字ハ寧ロ刪去シテ可ナランカ。章ヲ掲ゲテ元老院代議士院ヲ分ツト雖ドモ、其職掌トスル所ヲ掲グルヲ見ズ。固ヨリ職制章程ハ別置ノ法律タルベキヲ知ル、然ルニ立法權ノ本體ニ對シテ兩院ノ掌トスル所ヲ掲ゲザルヲ得ザルニ非ラズヤ、啻ニ兩院亦意見書ヲ上奏スルコトヲ得ルノミニテ可ナランヤ、又未曾有ノ代議參政權ヲ國民ニ與フベキ代議士院タル構成ノ所以ヲ示サズシテ、單ニ代

議士ノ三字ノミニ含マセ可ナリトスルヤ。

第二條　皇子ハ滿十八歲ニテ元老院議官ト爲ルノ權ヲ有シ、議官ノ上席ニ坐ス、滿二十歲ニテ始メテ公議ニ參ス。

太子ハ滿十八歲ニテ元老院議官ト爲ルノ權ヲ有シ、議官ノ上席ニ坐ス。滿二十歲ニテ始メテ公議ニ參ス。

議官　福岡　孝弟　意見

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

第三條　元老院議長及副議長ハ皇帝之ヲ議官中ヨリ選ブ。

第四條　元老院ハ立法ノ事ヲ掌ルノ外、上言書ノ立法ノ事ニ係ル者ヲ受ク。

元老院ハ上言書ノ立法ノ事ニ係ル者ヲ受ク。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

第四條ハ不備不明ト謂ハザルヲ得ズ。何ントナレバ元老院ハ立法ノ事ヲ掌ルノ故ニ上言ノ立法ニ係ル者ヲ受クトナラバ寧ロ可ナリトセン。然ラズシテ「ノ外」ト云ハ立法權ヲ受用スルノ外、或ハ彈劾ノ執政官ヲ裁判スルノ類ナルベシ。今此ニ舊ニ據テ元老院ハ立法ノ事ニ係ル者ヲ受クルトスルハ其理由ヲ得ザルニ似タリ。況ンヤ皇帝元老代議合同シ立法權ヲ行フモノニ於テヲヤ。

議官　福岡　孝弟　意見

第五條　議官ハ犯罪ノ故及其情願ニ由ルニ非レバ之ヲ免ズルコトヲ得ズ。

議官ハ終身其官ニ任ズ。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

第三章　代議士院及其權利

代議院及權利トナスヲ可トス。

第一條　代議士ハ法律ノ定ムル所ノ選擧規程ニ由テ之ヲ選ブ。本條ハ選擧規程ニ由テノ下ニ國民ノ二字ヲ加ヘ度事。

議官　箕作　麟祥　意見

第二條　代議士ハ任期ヲ四年トシ毎二年ニ全數ノ半ヲ改選ス。

代議士ハ任期ヲ四年トシ毎二年ニ全院ノ半數ヲ改選ス。

議官　神田　孝平　意見

第三條　代議士院會期ノ間議長副議長各三人ヲ公選シ、其氏名表ヲ奏進シ、而シテ皇帝之ヲ選ブ。

代議院會期ノ間、議長副議長各三人ヲ公選シ、其氏名ヲ奏進シ而シテ皇帝之ヲ選ブ。

議官　神田　孝平　意見

第四條　代議士ハ法律ニ定ムル所ノ費額ヲ受ク。

第四章　兩院通則

第一條　兩院ハ過半數ノ會員アルニ非レバ何事ヲモ議スルコトヲ得ズ。

兩院ハ過半數ノ會員アルニ非ザレバ議事ヲ開クコトヲ得ズ。

議官　神田　孝平　意見

第二條　兩院ノ會議ハ過半數ヲ以テ之ヲ決ス。

第二條　會議ノ字ハ議事ト改メ度事。

議官　箕作　麟祥　意見

第三條　法案ハ必ズ三回ノ會議ヲ經。

法案ハ必ラズ三回ノ會議ヲ經ベキ者トス。

議官　神田　孝平　意見

國憲草按各議官意見書

第四條　兩院ノ會議ハ公行ノ者トス、但議長若クハ議員五人以上公行スルコトヲ欲セズ、而シテ過半數之ヲ可トスルトキハ公行ヲ停ムルコトヲ得。

兩院ノ會議ハ公行トス、但議長若クハ議員五人以上公行スルコトヲ欲セズ、而シテ過半數之ヲ可トスルトキハ公行ヲ停ムルコトヲ得。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

第五條　議員ハ在場發言ノ故ヲ以テ審糾ヲ受クルコトヲ得ズ。

但各院ノ規則ニ遵フ。

第五條　稍通ジ難キ所アリ。蓋シ此本條ハ各國憲法中ニ議官及代議士ハ其職ヲ執行スル爲メ發シタル論說公評ノ故ヲ以テ之ヲ侵スコトヲ得ズトアルニ同ジキモノナルベシ。然ル時ハ在場發言ノ規則ニ遵フト遵ハザルトニ因ルニアラズ、但以下ノ字除去シテ可ナラン。

議官　福岡　孝弟　意見

議員ハ在場發言ノ故ヲ以テ審糾ヲ受ルコトヲ得ズ、但各本院ノ規則ニ遵フ。

議官　神田　孝平　意見

第六條　兩院會期ノ間議員現行犯アルニ非レバ之ヲ拘引拿捕スルコトヲ得ズ。

第七條　何人モ兩院ノ議員ヲ兼任スルコトヲ得ズ。

何人ニ拘ラズ兩院ノ議員ニ兼任スルコトヲ得ズ。

議官　神田　孝平　意見

何人モ兩院議員ニ兼任スルコトヲ得ズ。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

第八條　兩院ハ大臣參議諸省卿及長官ノ臨場ヲ求ムルコトヲ得、而シテ大臣參議諸省卿及長官

ハ常ニ兩院ニ至リ其意見ヲ述ブルコトヲ得、但其決議ノ數ニ在ラズ。

兩院ハ大臣參議諸省卿及長官ノ臨場ヲ求ムルコトヲ得、而シテ大臣參議諸省卿及長官ハ常ニ兩院ニ至リ其意見ヲ述ルコトヲ得、但其決議ノ數ニ加ハラズ。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

第九條　兩院ハ大臣參議諸省卿及長官ノ罪職務ニ係ル者ヲ劾スルコトヲ得。

第十條　兩院俱ニ開カザルノ時ニ方リ、一院法案ヲ議定スルトキハ、他ノ一院ノ開クル日ヲ待ツテ之ヲ報告ス。

兩院俱ニ開カザル時ニ方リ、一院法案ヲ議定スルトキハ、他ノ一院ノ開クル日ヲ待テ之ヲ報告ス。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

第十一條　法案已ニ一院ノ議定ヲ經ルトキハ之ヲ他院ニ送ル。他院若シ之ヲ變更スルトキハ又之ヲ前ニ議定スル所ノ院ニ返ス、前ニ議定スル所ノ院、又之ヲ變更スルトキハ又之ヲ他院ニ送ル、兩院竟ニ協同セザルトキハ各院同數ノ委員ヲ出シ、一ノ報告書ヲ作リ、各院之ニ據リ自ラ其可否ヲ決ス。

法案已ニ一院ノ議定ヲ經ルトキハ之ヲ他院ニ送ル、他院若シ之ヲ變更スルトキハ又之ヲ前ニ議定スル所ノ院ニ返ス、前ニ議定スル所ノ院又之ヲ變更スルトキハ又之ヲ他院ニ送ル、兩院竟ニ協同セザルトキハ各院同數ノ委員ヲ出シ、一ノ報告書ヲ作リ、各院之ニ據リ自ラ其可否ヲ決ス。

議官　神田　孝平　意見

第五編

行政權

第一條　皇帝ハ諸省ヲ置キ、大臣參議諸省卿及長官ヲ命ジ又之ヲ免ズ。

第一條　皇帝ハ諸官省ヲ置キ云々ト官ノ字ヲ加ヘ度事。

議官　箕作　麟祥　意見

第一條　諸省ヲ謂テ太政官ヲ謂ズ如何、蓋太政官ハ行政ノ主府ニシテ皇帝ノ上席スル所トス、之ヲ各國ニ比例セバ參議院タルベキカ、然ルニ朝廷太政官ヲ設ケラルルノ古制ヨリ沿來シテ今日猶此ノ三大分權ヲ總轄スル所トナサバ如故太政官ヲ稱スト雖モ可ナリ。然ラズシテ行政ノ總理院トシ、各國ノ參議院ニ同ジカラシメバ太政官ノ名ヲ廢シ單ニ之ヲ內閣ト稱スレバ可ナラン。大臣ハ卽チ內閣大臣ト稱スベシ（內閣ハ必ラズシモ三大權ヲ總轄スル皇帝上席シテ節制權ヲ含有スルモノトス）此條ニ太政官ノ字ヲ缺クモノハ若クハ其所以アルカ、起草者ニシテ何ント謂フヤ。省卿及長官トノミ謂ハ通ジ難キ所アルニアラズヤ。

議官　福岡　孝弟　意見

皇帝ハ諸省ヲ置廢シ、大臣參議諸省卿及長官ヲ任免ス。

議官　神田　孝平　意見

第二條　大臣參議諸省卿及長官ハ各其職務ノ責ニ任ズ、法律及皇帝ノ命令ハ責任アル者ヲシテ之ニ副署セシム。

第一條ト第二條トノ間ニ太政官ト各省トノ權限區別ヲ定ムル一條ヲ加ヘザレバ不可ナルニ似タリ。

議官　箕作　麟祥　意見

第二條　大臣參議省卿相連合シテ而シテ各其職務云々ト謂フ、大臣參議亦各省務アルニ似タリ、然ルニ大臣參議ハ行政ノ揔參官タリ、皇帝ニ參シテ揔參スルノ職務ハ責任ノ一部ニ歸シテ則チ法律命令ニ副署スベキハ固ヨリナリト雖ドモ、各省一專務官ト異ナルハ論ヲ待タザルベシ。然ル時ハ行政權ノ編中揔參官ト專務官トハ條ヲ分テ揭載セザルヲ得ンヤ。茫乎トシテ津涯ナキモノ尤是ナリ。

議官　福岡　孝弟　意見

第三條　大臣參議諸省卿及長官ハ國憲ヲ遵守スルコトヲ誓フ。

本條長官ハノ下ニ「忠ヲ皇帝ニ竭シ且」ノ八字ヲ加ヘ度事。

議官　箕作　麟祥　意見

第六編

司法權

第一條　司法權ハ各裁判所ニ由テ之ヲ行フ、各裁判所ハ只法律ニ遵フ他ノ命ヲ受ケズ。

司法權ハ各裁判所ニ由テ之ヲ行フ、各裁判所ハ只法律ヲ遵守ス。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

司法權ハ各裁判所ニ於テ之ヲ行フ、各裁判所ハ只法律ニ遵フ他ノ命ヲ受ケズ。

議官　神田　孝平　意見

第二條　裁判所ノ設置及權利ハ法律ノ定ムル所トス、法律ニ揭グル所ノ常規ニ由ルニ非レバ特ニ裁判所ヲ設クルコトヲ得ズ。

裁判所ノ設置及權利ハ法律ノ定ムル所トス、法律ニ由ルニ非レバ特ニ裁判所ヲ設クルコトヲ得ズ。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

第三條　陸海軍裁判所ハ別ニ法律ヲ用ユ。

第四條　國中ニ大審院一所ヲ置ク。

本條ハ國中ニ大審院一箇所ヲ置キ、法律ノ適施ヲ齊一ナラシムト改メ度事。

議官　箕作　麟祥　意見

國中ニ大審院一所ヲ置キ、又ハ臨時ニ高等法院ヲ設ク。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

第五條　大審院ノ職務ハ法律ニ揭グル所ヲ除クノ外兩院劾スル所ノ大臣參議諸省卿及長官ノ罪職務ニ係ル者ヲ裁判ス。

第五條ヲ左ノ如ク改メ度キ事。

國憲草按各議官意見書

又國中ニ高等法院一ケ所ヲ置キ、兩院劾スル所ノ大臣參議諸省卿及ビ長官ノ罪職務ニ係ル者ヲ裁判ス。

大審院並ニ高等法院ノ職務ハ法律ノ定ムル所トス。

議官　箕作　麟祥　意見

第五條云々ハ卽チ高等法院ノ事ナルベシ、然ルニ高等法院ノ構成ハ元老院ト通照シテ猶審議ヲ經ザルヲ得ンヤ。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

第六條　判事ハ犯罪ノ故及其情願ニ由ルニ非レバ之ヲ免ズルコトヲ得ズ。

第五條ト第六條トノ間ニ左ノ一條ヲ加ヘ度事、

第　條　各裁判官ハ皇帝之ヲ選任ス。

議官　福岡　孝弟　意見

判事ハ終身其官ニ任ズ。

議官　箕作　麟祥　意見

第七條　裁判所ノ裁判ハ民事刑事ヲ分タズ公行トス、但事ノ國安及風儀ニ係ル者ハ公行ヲ停ムルコトヲ得。

議官　東久世通禧　意見

第八條　裁判ハ必ラズ理由ヲ附ス。

議官　大給　恒　意見

第七編

府縣會及區町村會

第一條　每府縣ニ府縣會ヲ置キ每區町村ニ區町村會ヲ置ク其選擧規程ハ法律ノ定ムル所トス。

第二條　府縣會及區町村會ノ權利義務ハ亦法律ノ定ムル所トス。

第八編

國費

第一條　政府ハ毎年次年ノ國費計表及國費ヲ支ユ可キ意見書ヲ兩院ニ送リ、又租稅徵收及費用ノ報告書ヲ送リ以テ其檢査及承認ヲ得但此事ハ先ヅ代議士院ノ議決ヲ經。

租稅ハ法律ノ許ス所ノ者ニ非レバ之ヲ賦課スルコトヲ得ズ。

第一條但以下明暢ナラズ、本文ハ檢査及承認トノミアリ、但以下ハ議決トアリ、是レ蓋シ本文ハ國費租稅ノ條款ナリ、但以下ハ立法權內ノ條款ニシテ代議士院ノ權利義務ヲ記スル部ニアルベキカ明暢ナラザル所以ン。

豫算表ノミアリテ決算表ナキハ如何ン。　附言

此編ニハ關セサレトモ

海陸常備兵ノ增表簿ヲ認許制定スルモ兩院ニ於テスル所ニアラズヤ。

議官　福岡　孝弟　意見

皇帝ハ毎年次年ノ歲入歲出豫算表及前年ノ歲入歲出計算表ヲ兩院ニ下附シ之ヲ議定セシム、但此事ハ先ヅ代議院ノ議決ヲ經ベキ者トス。

議官　神田　孝平　意見

第二條　租稅ハ法律ノ許ス所ノ者ニ非レバ之ヲ賦課スルコトヲ得ズ。

租稅ニ係リ苟モ特准ヲ與フルコトヲ得ズ。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

賦稅ハ兩院ニ於テ毎歲公評シテ之ヲ定ムルモノトスルカ、又ハ一定ノ租法ト一歲限ノ租法ト分別シテ之ヲ議定スルカ審定セザルヲ得ズ。

議官　福岡　孝弟　意見

第三條　事ノ租稅ニ係ルハ漫ニ特權ヲ與フルコトヲ得ズ。
政府ハ每年次年ノ國費計表及國費ヲ支ユ可キ意見書ヲ兩院ニ送リ、又租稅徵收及費用ノ報告書ヲ送リ以テ其檢查及承認ヲ得但此事ハ先代議士院ノ議決ヲ經。

議官　東久世通禧　意見
議官　大給　恒　意見

本條ハ削除シタル方可ナランカ、

議官　箕作　麟祥　意見

第四條　國債ハ法律ノ許ス所ニ非レバ之ヲ募ルコトヲ得ズ、政府ヨリ債主ニ對スルノ義務ハ犯ス可ラズ。

第五條　貨幣ノ斤量品性價値及紙幣發行ノ額ハ法律之ヲ定ム。
貨幣ノ斤量品性價値及ビ紙幣發行ノ額度量衡ノ制ハ法律之ヲ定ム。

議官　東久世通禧　意見

第五條ノ下ニ左ノ一條ヲ加ヘ度事、

第　條　各官廳ノ會計檢院ノ調查ヲ受クベシ。

議官　大給　恒　意見

議官　箕作　麟祥　意見

第九編
國憲修正

第一條　若シ國憲中修正ヲ要スル者アリテ、果シテ已ム事ヲ得ザルヲ見ルトキハ立法權之ヲ宣告ス。
此宣告ト謂フハ皇帝及兩院ノ際ヨリ修正スベキヲ認メテ、其修正ヲ議スルヲ宣告スルヤ又ハ既ニ修正ノ決議シタル憲法ハ、立法權之ヲ宣告執行スト云フナルヤ。

議官　福岡　孝弟　意見

第二條　國憲ノ修正ヲ議スルハ兩院ノ議員三分二以上相會スルニ非レバ其事ヲ議スルコトヲ得

ズ、而シテ其事ヲ可トスル者三分二以上ニ上ラザレバ之ヲ變更スルコトヲ得ズ。國憲ノ修正ヲ議スルハ各院ノ議員全數三分ノ二以上其事ヲ可トスルニアラザレバ之ヲ變更スルコトヲ得ズ。

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

附錄

國憲ヲ確定シ及施行スルノ方法ニ於テ如何カアルベキ、固ヨリ國憲ハ我國未曾有ノ創立タルモノナリ。先ヅ大詔ヲ發シテ假ニ國會ヲ興シ之ヲ確定セントスルカ、先ヅ政府之ヲ確定シテ大詔ヲ以テ之ヲ宣布施行スルカ、此斷別大樞要ニシテ豫定セザルヲ得ンヤ。今此附錄ニ於テ猶假則ノ款條ヲ設ケザルヲ得ザルモノアラン、又法律ノ之ト牴觸セズト雖モ、適當セザルヲ以テ廢止且修正ヲ要スルモノアラン。國憲施行諸法律適合セシムルノ際、假則ノ要件固ヨリ多カルベシト思考ス。

議官　福岡　孝弟　意見

第一條　國憲施行ノ日若シ法律ノ之ト牴觸スル者アルトキハ之ヲ廢ス。

第二條　國憲施行ノ日ヨリ文武百官ハ忠ヲ皇帝ニ竭シ、且國憲ヲ遵守スルコトヲ誓フ。文武百官忠ヲ皇帝ニ竭シ國憲ヲ遵守スルコトヲ誓フ。

本條削除

議官　大久保一翁　意見

議官　東久世通禧　意見

議官　大給　恒　意見

國憲草按致一覽候處大體異論無之、勿論各國通例時勢適應ノ儀ニ付、速カニ御斷行相成可然奉存候。逐條間一二鄙見者之分ハ朱筆ヲ以テ行間ニ書加申候也。

明治十三年十一月十五日

議官　神田　孝平　謹具

右二ケ所ノ外條中ニハ心付無之候。國憲御定ハ不容易義ニ付、全國一般今一段知識開通ニ不到シテハ却テ弊害相生ジ、良民ノ困苦ヲ可醸哉ト焦慮仕此段副テ申上候也。

國憲草按ニ付意見ヲ有セス

議官　大久保一翁　拜

議官　伊集院兼寛
議官　黒田清綱
議官　吉井友實
議官　齋藤利行
議官　岩村通俊
議官　林友幸
議官　玉乃世履
議官　楠木正隆
議官　柴原和
議官　河瀬眞孝
議官　中村弘毅
議官　鶴田皓

古人言、物本末アリ、事終始アリ、先後スル所ヲ知レバ道ニ近シト。今ヤ本院國憲起草ノ勅ヲ奉ジ其按ヲ捧グルニ及デ謹デ小言ヲ獻スルモノアリ。抑々國憲ノ國ニ於ケル重且大ナリ。然レドモ始メテ之ヲ我朝ニ創スルニアラズ、海外萬國各異同アリト雖ドモ、既ニ已ニ之ヲ行フモノアリ、必ラズ其宜シキヲ參酌シ、吾國體ニ基キ人文開進ノ度ヲ圖リ、其能ク適應スルモノヲ取ル固ヨリ不可ナカルベシ。其條項ヲ草スルガ如キハ臣以テ甚ダ難シトセズ。唯臣ガ深ク慮ル處ノモノハ之ヲ行フノ時機ト、其之ヲ定ムルニ一ニ聖斷ニ出ルト否ルトノ如何ニア

議官　津田出
議官　本田親雄
議官　安場保和
議官　岩下方平
議官　津田眞道
議官　水本成美
議官　渡邊驥
議官　楠田英世

ルノミ。世ノ論者多クハ速ニ國會ヲ開キ、必ラズ國約ニ付スルヲ期スル者ノ如シト雖ドモ、苟クモ其機ヲ察セズ、强テ輿論ノ迫ル處トナシ、蒼卒之ヲ施行スルコトアラバ國家ノ憂患將ニ之ヨリ胚胎セムトス。必ズヤ之レニ先チ大ニ政府ノ大本ヲ定メ、前途ノ方針ヲ明ニシ、本末終始ヲ誤ルコトナクンバ、明日ヲ以テ國會ヲ開クモ臣以テ早トセズ。其本末ノ點ニ於テハ窃カニ見ル處ノモノアリト雖モ、文筆ノ能ク盡ス處ニアラズ、仰ギ願クハ陛下特恩ヲ垂レ、龍顔ニ咫尺スルノ榮ヲ賜バ謹デ衷心ヲ奏セントス。誠惶誠恐　頓首謹言

明治十三年十月

議官　渡邊　昇　意見

孛弟國憲起草ヲ讀ミ、其修正ヲ請ハント欲スルモノハ、之ヲ起草ノ衍間ニ掲ゲ又別ニ其大體ニ關スル意見ヲ陳述シテ以テ之ヲ此ニ掲グ。

其第一曰、抑々國憲ハ皇帝大ニ國民ト誓約セラルル所ノ建國憲法タルモノ、固ヨリ尋常法律ノ比ニアラザルハ論ヲ待タザル所ナリ。且國憲ヲ定ムルハ皇帝未曾有ノ鴻業ニシテ、近ク維新興復以降ノ結果タルベク、而シテ自今更始ノ大基礎タルベク、其關節ニ於ケル豈容易ナランヤ。今此起草ハ各國ノ成憲ヲ參酌シテ簡時適約ノ憲法ヲ得タルモノト謂フベシ。然ルニ之ヲ讀ムニ茫乎トシテ津涯ナキヲ覺ユルモノアリ。蓋シ其事ノ明瞭ナラザルニアラズ、顧フニ從來我政府ノ構成ト地位トヲシテ、未ダ立憲ノ本體ニ臨マシメザルニアルノミ。若シ一應ニ之ヲ視レバ太政官各省アリテ行政ノ權ヲ行フ、元老院アリテ立法ノ權ヲ行フ。三大權業既ニ劃立ス、體裁亦固ヨリ專制ノ政府ニアラズ。國憲ヲ確定施行スルモ何ノ難キコトアラン。是レ大ニ然ラズ。試ニ之ヲ思ヘ、太政官ハ行政一部ノ總理院タルカ、將タ從來三大權ノ總轄官タルカ、元老院ハ純乎タル立法議院タルカ、將タ太政官圍範ノ議法官タルカ。而シテ諸裁判所ノミ司法ノ權ヲ執テ稍純ナルモノト雖ドモ、未ダ其法律ノ實踐セザルモノアリ。今之ヲ是レ講究セズシテ國憲ヲ確定施行セバ、縱令ヒ代議士院ヲ創開スルノ喝采ヲ天下ニ得ルモノトスルモ、此純乎タラザルノ元老院ヲ以テ創設銳意ノ代議士院ト對抗シ、紛々トシテ國國ニ副適スベキ規則條例ヲ起議改竄セントスルガ如キハ、之ヲ想像シテ如何ナル形影ヲ現出ストセンヤ。政府先ヅ宜ク太政官ノ構成如何ンヲ顧ミ、立法行政ノ二權ヲ明劃シテ現ニ

皇帝大ニ國民ト誓約セラルベキノ地位ヲ定ムベキノミ。若シ之ヲ定メズシテ徒ラニ簡明適約ノ國憲ヲ得タリト謂フト雖ドモ、之ヲ讀テ茫乎津涯ナキノ嘆ヲ起サザルヲ得ンヤ。伏請フ唯國憲ニ臨ムベキ政府ノ構成ヲ豫定セラレンコトヲ。

其第二曰、國憲ニ臨ムベキ政府ノ構成ヲ豫定スルハ先ヅ其太政官ノ構成如何ンヲ講究スルニアリ。抑々太政官ト稱スルモノハ右制ヲ損益シテ之ヲ構成シ、則太政ノ字ヲ冠シタル國政總理ノ名ナルベシ。今日ニ在テ三大分權ヲ總轄スルモ亦宜ナリ。苟クモ國憲ヲ起草シテ三大分權ヲ明劃スルニ至テハ、別ニ太政ノ字ヲ冠シタル國政總理ノ名アルベカラズ、然ラバ則自今斷ジテ太臣或ハ二大臣トシ、同ジク內閣大臣ト稱シ　參議ハ內閣參議官ト稱スベシ。（卽參議院ノ制ヲ倣シテ立ツルモノトス）若夫レ然ラズシテ唯大臣タルモノヲシテ

皇帝ノ事ニ翼贊輔相シテ其責メニ任ゼシメ、從來ノ參議ハ全ク其位置ヲ廢シ、諸省卿ニ直接スベキノミ。而シテ內閣ハ諸省ノ首班ニシテ

皇帝ノ上席スル所トシ、大臣ハ兼テ宮內式部ノ二局管スルモノトス（卽佛國政省ニ比スルモノトス）恐ラクハ此兩斷ニアラズシテ他ニ國憲ニ臨ムベキノ地位アランヤ。（孝弟窃カニ謂ラク、今此兩斷ニ於ケル參議院ノ制ニ模倣スルハ現今ノ構成ニ近キヲ以テ、或ハ變成シ易シトセン。唯一洗ノ換面ヲ滿足セシメンコトヲ要セバ、國政省ニ比スルニ如カズトス。伏請フ唯太政官ノ構成ヲ變換スルヲ以テ急務トセラレンコトヲ。

明治十三年九月

議官　福岡　孝弟　意見

國憲編纂起源

乾

岩倉公へ遣シタル書翰

宮島誠一郎

肅啓閣下益御安適御執掌爲國奉祈候陳者昨年來御內約ニ及候去五六年頃閣下歐洲御派出御留守中廟堂之形勢國憲編纂起原ニ屬スル部分小子私記中ヨリ抽出日月ヲ揭ゲ寫取申候素ヨリ外露致候テハ不都合之物ニ付閣下切御所見被下度奉存候時宜ニヨリ伊藤參議へ被差廻候テハ如何ニ候哉此又御一考被下度奉願候昨年亡父病中ヨリ取調終ニ喪服ニ相會シ候爲メ非常延引仕候御繁忙中恐入候得共一兩日中御參朝前暫時拜謁仕度此旨以書中奉伺候也謹言不宣

明治十四年五月十一日

岩倉具視殿閣下

宮島誠一郎拜

右大臣ヨリ答翰

去月御書披見愈御安泰欣然ニ候然者昨年御內話御座候去五六年頃小生洋行中御抄錄書御廻忝

存候篤ト覽觀致度候間暫時留置申候此段御答迄乍延引一筆如此座候也

六月九日

宮島誠一郎殿

具視

明治五年壬申四月小官左院ニ奉職ス、此時參議西郷隆盛板垣退助現ニ政府ニ在リ。右大臣岩倉具視參議木戸孝允大藏卿大久保利通歐米諸國ヘ條約延期ノ大使トシテ派出ノ留守ナリ。然ルニ當時廢藩立縣ノ日猶淺シ、物論囂シテ近ク府下ニハ民權自由ノ主義ヨリ共和政體ヲ主張スル黨派アリ、遠ク諸縣ニハ封建守舊ノ主義ヨリ君主專裁ヲ主張スル論黨アリ。此際政體一定セザレバ到底如何ナル時勢ヲ現出スルモ難計、左院ハ正院ノ顧問職ニ備ハリ、漸々立法ノ權ヲ有スレバ、是非トモニ國憲御確定有之度、大議官伊地知正治ニ協議センニ、同氏頗ル左袒、正院ニ於テハ板垣參議大ニ贊成アリ。速ニ西郷參議ニモ熟議有之卽チ小官左院儀制課長ノ任ヲ以テ後藤議長迄左ノ通リ建白ス。

立國憲議

至尊ハ天下人民ノ父母ナリ、父母タルノ權利アレバ、人民ヲ保護スルノ義務アリ。

朝廷之ガ爲メニ官ヲ設ケテ之ヲ支配セシム。卽チ政府ナリ。政府已ニ此權利ト義務トヲ有スレバ、人民亦之ニ對スル權利義務アルベキコト勿論ニテ、之ヲ定ムルハ先ヅ其國憲ヲ立ルニ在リ。其國憲ニ準ジテ民法ヲ定メ、人民相互ノ義務ヲ行ハシム。而シテ其國憲民法ニ違フ者ハ刑法ヲ設ケテ之ヲ律ス。此ニ於テ政府始メテ人民保護ノ道定ルナリ。故ニ國憲立チ民法隨テ定リ、

國憲民法定テ然ル後ニ刑法始テ設クベシ。是方今國憲ヲ立ルノ議尤急務タル所以ナリ。抑々皇國古來固有ノ國體ハ君主獨裁ニシテ、百般ノ政事唯在上ノ施爲ニ在リ。人民素ヨリ權利ノ何物タルヲ知ラズ。併セテ義務ノ何事タルヲ不知ナリ。今ヤ外國交際日ニ開ケ月ニ盛ナルノ時ニ當ル。然ルニ無智蒙昧ノ人民漸々外國ノ國體ヲ窺ヒ、自主自由ヲ名トシテ徒ラニ自己ノ權利ヲ誇張シ、却テ其義務ヲ勤メトス。甚ダシキニ至リテハ共和政體ノ論ヲ爲スモノアルニ至ル。宜シク先ヅ至當ノ國憲ヲ立テ、君權ヲ確定シテ皇國固有ノ君權如何國憲如何ヲ邦內人民ニ告知スベシ。而シテ其君權國憲ニ則トリテ、適宜相當ナル民法ヲ定メ、人民ニ權利ヲ與ヘ、從テ義務ヲ行ハシム。之ニ違フ者アレバ卽チ刑法ヲ以テ之ヲ罰ス、民法ハ令ナリ、刑法ハ律ナリ。律令ヲ定ムルハ我

天皇陛下ノ權ナリ。

其國憲ヲ定メル如何。古來固有ノ君主獨裁ヲ以テ之ヲ定ムルトキハ、或ハ人民ヲ抑遏シ、開化ノ進歩ヲ妨グルノ弊害アルヲ免レズ。君民同治ノ法ヲ取テ之ヲ定ムルヲ尤モ宜シトス。雖然文明ノ化未ダ下民ニ及バズ、教育ノ道未ダ成ラズ。今假令ヒ民選議院ヲ設クルトモ國是ハ論ヲ取ルベキモノ萬人中ニ恐ラクハ一人ヲ得ルコト難ク、却テ紛擾ヲ招クニ至ルベシ。然ラバ則君主獨裁ノ體ヘ君民定律ノ中ヲ取テ國憲ヲ定メ、萬機憲法ニ徴シテ之ヲ行フヲ可トス。其憲法ヲ定ムル、左院之ヲ論定シテ之ヲ正院ニ致シ、右院及ビ府縣ノ官員同一スルニ至テ、裁決ヲ、至尊ニ仰ギ、以テ天下ニ布告スベシ。左院ハ國議院ノ如ク、正院ハ元老院ノ如ク、右院（諸省長次官ノ會議所）ト府縣トノ官員ヲ以テ、姑ク民選議院ト看做スベキナリ。然シテ此國憲ニ準據シテ政務ヲ施行シ、漸々開化ノ進度ヲ待テ、眞ノ民選議院ヲ設ルナリ。仍テ君主獨裁ニ君民同治ノ中ヲ參酌シテ至當ノ國憲ヲ定ルヲ當然ノ順序トス。

右上申至急御評決被下度奉願候也。

壬申四月

少議官儀制課長　宮島誠一郎

然ルニ副議長江藤異論有之、所謂國憲ナル者、佛蘭西ノ五法ノ如ク、廣ク人民ニ關渉セシモノニテ、其性質帝王自然ノ憲法ニ非ズト之ヲ拒ム。其後江藤ハ司法卿ニ轉任シテ、伊地知氏副長ヲ命ゼラル、此時大久保大藏卿米國ヨリ御用有之、中途歸朝ニ相成リシニ依テ、此建白草案ヲ送付シ、猶隨行歸朝ノ吉原某ニ相示シ、英佛等ノ立法行法等ノ組織方法ヲ尋問シ、五月十三日大久保卿ヲ弊宅ニ招請シ、篤ト建言始末ヲ陳述ス。因テ翌十四日正院へ進奏ス。

大久保卿五月十五日ヲ以テ再ビ歐米へ派出ノ後、同月二十二日ヲ以テ正院ヨリ、左之通推問アリ。

此時内務新設ノ建言モ別冊ニアリ

左院へ

府縣代人ヲ以テ議員ニ充テ集議ヲ興シ候儀御治定相成候條右規則取調可申出候事

千申五月二十二日

右ノ明文御渡ニ相成、五月二十五日ヲ以テ、

天皇九州御巡幸被爲在タリ。板垣參議小官ニ囑シテ頻ニ後藤議長ニ取調書進達ノ事ヲ督促セシム。因テ左院ニ於テ取調左之通

（此時始テ新製ノ文官大禮服ヲ着セラレ鹿兒島ニ御巡幸相成ル）

國會議院假手續取調

國會議院御創建ノ手續、取調候樣御下命有之候ニ付、乃チ取調別冊規則之通ニ御座候。然リト雖モ今俄ニ之ヲ御施行有之候テハ、實地ニ難被爲行事情モ可有之懸念仕候間、先ヅ此度ニ限リ、左ノ手續ヲ以テ、御施設有之可然奉存候

一　國會議院ハ東京ニ於テ一個所ヲ設ク。

一　國會議院ノ會議期限ハ今玆壬申九月中迄ニ各府縣ノ官員東京ニ會集スベシ。

一　議事ノ開院ハ十月中旬タルベシ。

一　國會議院ハ每年一度ヅヽ必ズ開クヲ以テ恒例トス。其開院ノ日數ハ三個月ヲ以テ期限トス爲スト雖モ、本年一會ハ先ヅ五十日ト定メ、遲速ハ時ノ宜キニ從フベシ。

右個條ノ外數件ノ規則アリト雖モ各府縣官員出京ノ上頒布致スベキ事。

御布告ノ御趣意取調大略左ノ通。

一　積年深ク宇內ノ形勢ヲ御熟察、此度泰西各國議院ノ法則ニ基キ東京ニ於テ國會議院ヲ御創建云々ノ事。

一　本年一會ニ限リ參事及ビ權參事等ノ內ヨリ一人ヅヽ、議事ノ爲メ可差出云々ノ事。

一　國會議院ハ選擧人等相立議員入札公選等ノ方法具備ス、然リト雖モ今俄ニ之ヲ施行セバ恐ラクハ支吾ノ憂ヲ生ゼン。故ニ先ヅ地方ノ官員ヲシテ議院ヲ立ル所以ノ方法處置ヲ評議セシメ、然シテ後來酉年ヨリ開院規則ノ通施行候條、其心得ヲ以テ施設ノ緩急事業ノ成否或ハ前途ノ目的等ヲ熟議シ出京可有之云々ノ事。

一　前後ノ處分手續書ニ照準可致云々ノ事。

右樣ノ體裁ヲ以テ御布告有之可然奉存候也。

壬申八月

左院

議員ヲ選ムノ事

一　第一　農工商ノ財產アリテ文字ニ通ジ事務ノ論モ相應ニ出來ユル者。

一　第二　右ノ見込ノ者ナキ時ハ寧ロ財產ニ乏クトモ文字ニ通ジ事務ノ論相應ニ出來ユル者。

但シ議員ハ來酉年ノ春ヨリ三府七十二縣ニ一人宛ヲ出スベシ。

議員ヲ選擧スル人ノ事。

一、府縣下農工商ノ中財産アリテ事務ヲモ可ナリ心得シ者百人或ハ二百人ヲ寄セ假ニ選擧組ト稱ス。

一　右選擧組ニテ議員一人ヲ擧ルニ前ニ揭グル二條ノ見込ヲ以テ入札シ其札數ノ多キモノヲ以テ定ムベシ。

但シ財産ノ數並ニ選擧組人數ノ多少ハ府縣ノ適度ヲ以テ定ムベシ。

前文至急議長マデ差出ト雖モ議長敢テ進奏セズ、其意避朝ノ內意アルニ似タリ。又西鄉參議ノ供奉薩摩ニ到ルヤ、鳥津久光並ニ藩士和田某（八之進）ヨリ數件ノ建白ヲ宮內卿（德大寺實則）ニ進奏ス。辭シテ受ラレズ、此時陸軍省沸騰ノ事起ル、西鄉氏　還幸ニ先チ東京ニ入ル、小官一日板垣ヲ訪ヒシニ、同氏曰ク、代議士取調ノ議モ已ニ機會ヲ失フ、而シテ西鄉同僚ノ歸ルヤ、御巡幸前ノ氣勢ニ非ズ、少シク心配アルニ似タリ。國會設立モ覺束ナシ云々、仍テ左院ニ於テ取調タル草案モ無效ニ屬ス。然ルニ　還幸ノ後、果シテ和田某上京、左院ニ建白ス、小官之レニ應接ス、其書中云々在廷ノ大臣ヲ非議スルモノ專ラ西鄉參議ヲ指スニ似タリ。遂ニ說論之上、其建白ヲ却下ス。時十一月ナリ。

此案議院ニ發論ジテ朝鮮事件ト爲ルノ原因ナリ

明治六年二月之下旬ニ　廟議木戶大久保ヲ歐洲ヨリ召還ノ命アリ。右ハ此頃廟堂ニ於テ頻ニ發論ノ事件ハ、官省ノ章程其宜ヲ不得シテ、行政諸省頗ル偏重ヲ不免、今日ノ勢諸省封建ノ姿ヲ爲ス、就中大藏ノ如キハ地方民政ヲ兼管シ、爲メニ撫育治產ヨリ租稅徵收ノ事迄一權內ニ併歸シテ縣治上苦情不少、此弊害ヲ撓ント欲セバ出納ノ外金券發行租稅增減等ノ事、一切正院ニ於テ綜理セザルベカラズ。剩サヘ正院ハ太政大臣一人ノ外、唯西鄉大隈板垣三參議ニテ、日々諸省百般ノ事務ヲ親判スル、實ニ煩冗ヲ極ムルナリ。仍テ此際更ニ正院中ニ於テ內閣ヲ置キ、參議ヲシテ議官ヲ兼任セシメ、大ニ立法ノ權ヲ握リ、而シテ議政行政ヲ分ツテ議政ノ下ニ國會院ヲ創立シテ府縣ノ民情ヲ暢達シ、行政諸省ノ偏重ヲ平均スルハ今日ノ急務ナリトノ廟議ヨリ木戶大久保ヲ召還セラルルナリト。然ルニ三月頃ヨリ、大藏省ニ於テ府縣長次官ヲ召集シ、地租改正ノ事ヲ議セントス。其規則章程、議長議員ヲ設ケ、可否ノ多數ニ因テ、議事ヲ決スル等ノ事、議院ノ權內ニ犯入シテ行政ノ施行スベキ所ニアラズ。仍テ正院ヨリ之ヲ破毀シ、會議稍額色アリ。

內閣之稱於是始テ出ヅ

四月十九日、後藤議長、江藤司法卿、大木支部卿等更ニ參議ニ任ゼラル。二十三日ヨリ正院ニ政體潤飾ノ議相始ル、且ツ內務省ヲ立テ大藏ノ民政ヲ分チ、國會ヲ起シテ府縣ノ民情ヲ暢達シ、文部ノ敎育ヲ隆ニスル、工部ヲ人民ニ付スル、州縣ヲ革正スル、國法ヲ定立スル、廟議日

ニ熾ニシテ左院之ガ爲ニ推問頗ル多シ。

五月二日ニ到テ政體御潤飾御布令、正院職制章程定被仰出、西郷、大隈、板垣ノ外ニ後藤、大木、江藤ノ三參議ヲ增加シ、內閣議官ヲ兼任セシメ、新ニ內閣ノ名稱ヲ設ケラル、左ノ如シ

勅旨

明治四年辛未七月制定スル所、官省ノ位置、職員ノ權限、各其序ヲ得ルト雖ドモ當今ノ時勢、現務上ニ於テハ其弊ナキ能ハズ。故ニ太政官ノ職制章程ヲ潤飾ス、百官其レ之ヲ奉承セヨ。

明治六年五月二日

太政官職制

天皇陛下親臨

正院

太政大臣

天皇陛下ヲ輔弼シ萬機ヲ統理スルコトヲ掌ル。

諸上書ヲ奉聞シテ制可ノ裁印ヲ鈐ス。

左右大臣

職掌太政大臣ニ亞グ、太政大臣缺席ノ時ハ其事務ヲ代理スルヲ得。

參議

內閣ノ議官ニシテ諸機務議判ノ事ヲ掌ル。

以上三職トス。

大史以下略之。

左院

職制章程追テ定ムベシ。

右院

各省長次官各當務實際ノ可否ヲ議スルヲ掌ル。

太政官

正院事務章程

正院ハ

天皇陛下臨御シテ萬機ヲ總判シ、太政大臣左右大臣之ヲ輔弼シ、參議之ヲ議判シテ庶政ヲ奬督スル所ナリ。

太政大臣左右大臣ハ各一員ヲ限リ參議ハ定員ナシ。

凡ソ立法ノ事務ハ本院ノ特權ニシテ總テ內閣議官ノ議判ニヨリテ其得失緩急ヲ審案シ、行政

實際ニ附スベキモノハ奏書ニ允裁ノ銀印ヲナシ、然ル後主任ニ下達シテ之ヲ處分セシム。

凡テ允裁ヲ乞フ、奏書ハ內閣議官議判ノ上內史其部類ヲ分チ、之ヲ本帖及副本ニ寫シ、本帖ニハ議官之ニ連印シ、內史之ニ記名シ之ヲ太政大臣ニ出ス、太政大臣之ニ銀印シテ御批允裁ヲ受ケ、之ヲ外史ニ付シテ奉行セシム。

但內閣ノ議決スレバ卽日本文ノ手續ヲナシ、御批允裁ヲ經レバ翌日之ヲ頒布スルヲ恒例トス。

凡帝國一般ニ布告スル制度條例及勅旨特例ノ事件ハ太政大臣ノ名ヲ以テ本院ヨリ之ヲ發令ス、諸省使寮司局ヲ廢立分合シ、行政事務取捨ノ便宜ヲ謀リ緩急ヲ判スルハ皆本院ノ特權タリ。

勅書奏書ニ加名銀印スルハ太政大臣ノ任タルベシ。

凡ソ勅任官ノ薦擧免黜ス。

宸斷ニ出ルト雖必ズ內閣議官ニ諮リ、太政大臣之ヲ輔贊シテ進退ス。

凡ソ奏任官ノ進退ハ其所轄ノ奏聞ニヨルト雖ドモ必ズ內閣議官ニ諮リ太政大臣之ヲ處置ス。

本院中判任官ノ進退ハ其所屬ノ具狀ヲ得內史ヲシテ之ヲ處置セシム。

議政行政ニ屬スル諸文書法案又ハ勅書令條差除黜陟ノ記錄等ハ內史ニ付シテ司掌セシム。

恒例ノ公文既發ノ命令通常ノ達書等ハ外史ニ付シテ司掌セシム。

內外史所屬ノ各局課式部寮等ノ事務ハ各其主任ヲシテ之ヲ管理セシム。

本院中專掌スル事務ノ條款左ノ如シ。

第一款帝國經理事業ノ緩急ヲ考勘シ之ガ目的ヲ定ムル事○第二款諸制度諸法律及諸規則ヲ草案シ之ヲ議決スル事○第三款賞罰ノ事○第四款歲入ノ事既定ノ諸租稅ヲ增減變更スル事新ニ諸租稅ヲ興ス事○第五款歲出ノ事諸官省各局各地方官公費ノ額ヲ定ムル事諸官祿及旅費其他雜費ノ制限ヲ定ムル事諸族ノ秩祿及社寺給與ノ制限ヲ定ムル事臨時諸費ノ制限ヲ定ムル事非常ノ軍費及國費ヲ裁定スル事○第六款貨幣製造ノ方法及其品量ヲ定ムル事○第七款金券ヲ發行スル事○第八款內外國債ノ事○第九款度量衡等ヲ改正スル事○第十款州郡ノ經略ヲ畫定シ及府縣ノ制置土地ノ名稱等ヲ更正スル事○第十一款諸港津ヲ開閉スル事○第十二款驛遞運輸ノ法及ビ郵便規則ヲ改メ道路ヲ變換シ里程ヲ釐正スル事○第十三款地方警邏ノ規則ヲ定メ或ハ之ヲ變革スル事○第十四款鐵道電信ノ行線燈臺設置ノ場所ヲ定ムル事○第十五款兵制ヲ改革スル事○第十六款兵員ヲ增減スル事○第十七款鎭臺兵營及ビ提督府等ヲ變更スル事○第十八款城壘武庫等ヲ築造スル事○第十九款裁判所ノ權限ヲ定スル事○第二十款各國條約ノ事○第二十一款官員ヲ增減スル事、內閣ハ

天皇陛下參議ニ特任シテ諸立法ノ事及ビ行政事務ノ當否ヲ議判セシメ、凡百施政ノ機軸タル所ナリ。內閣ノ職員ハ各地方監察按撫布政等ノ故ヲ以テ特命派出シ各部ヲ巡回スルコトアルベシ。

凡行政實際ニ渉ル事項ハ必ズ其便否得失ヲ主任ノ長官ヲ呼ビ之ニ諮問シテ後太政大臣ニ出ズベシ。

當痾不參ノ者アレバ回議ヲ其邸ニ送リ其所見ヲ取ルベシ。

御批

右職制事務章程

上裁制定スル所ナリ。能ク之ヲ守リ其程限ヲ愆ル勿レ。

明治六年五月二日

奉勅　太政大臣　三條實美

別紙之通被　仰出候ニ付テハ最前御渡相成候各省事務章程中此權限ニ牴觸矛盾スル者ハ被廢止候條此旨可相心得事

明治六年五月二日

太政大臣　三條實美

右ノ甲令アリ、而シテ木戸大久保未ダ歸朝セズ、此ヨリ先キ大使ノ洋行ニ臨ミ、參議以下諸省

ノ長次官連印ノ證書ヲ以テ、大使留守中ハ大事件ハ更革スベカラズト誓約アリシニ、政事ハ活機ナリ、數年ノ間之ヲ膠守スベカラズ。遂ニ潤飾ノ段ニ到リシニ名ハ潤飾ニシテ實ハ改正ナリ。故ニ黑田開拓次官清隆其破約ヲ憤リ、太政大臣ニ迫ルニ連印ノ不信ニ屬スルヲ以テ、證書ノ自名ヲ切取ルヲ以テセリ。又井上大藏大輔馨ハ、卽日職ヲ辭ス。而シテ此改革ノ初メニ當リ、五月四日皇城災上、太政官並ニ左院一時ニ蕩盡、萬般書類一切灰燼、嗚呼可歎哉。五日ヨリ太政官代並ニ左院ハ馬場前門內某邸ニ移轉假住居ト相成ル。然ルニ左院ハ伊地知副議長一人ニテ擔當セラレ、而シテ職制章程モ未ダ御下ゲ渡シ之ナシ。仍テ諸議官淘々トシテ安ンゼズ。於是余ノ愚考ニハ左院ヲ今般設立ノ國會議院ノ上ニ御取設ニ相成リ、地方議員ヲ偶誘致候方當然ナルベシト、副議長ニ內々相謀リ候處、至極可然旨同意ニ有之、五月九日建言左之通。

左院改定之議

今般政體御改革、本院章程追テ御改正可相成旨御布令ニ付、左ニ申上候、本院是迄ハ正院ノ推問ニ依テ決議之權有之議事上ニ聊其不足ヲ補ヒ、有用ノ御場所ニ有之候處、新ニ正院中ヘ內閣議院御設立ニ相成萬機判決被仰付候得バ、卽チ儼然タル立法官ニ相準ジ、本院ハ無用之姿ニ相成候得共、到于此正院ハ始テ屹立致シ、政令施行其宜ヲ得テ行政諸省ハ是迄ノ弊害ヲ去リ、偏重ノ患有之間敷相成可申ト不堪敬服、然ルニ獨リ恨ラクハ地方人民蒙昧不學何ノ時

カ開明ノ域メニ進ムベキヤ、民智如此不開民權亦タ隨テ不立百般ノ事業隨テ不成、幸ニ本院ハ辛未廢藩後新設ニ相成而來內外制度事務取調致來候得バ、此際御改定相成リ今般御創立ノ國會院ノ上ニ御取設ニ相成地方議員ヲ倡誘シ、人民一般保護ノ爲メニ相成候樣致度此段上陳候也。

明治六年五月八日

副議長伊地知正治殿

三等議官　宮島誠一郎

右建言伊地知迄進達之處、九日副議長ヨリ至當之見込ニ付、早速上申可致旨申來、其後返翰左之通、

先日御獻言拜承候處、病氣不參ニ付、後藤參議迄云々之次第申上置候處、爾後別紙之通返詞到來ニ付、爲御安心差上申候也、

五月十二日

宮島議官殿

伊地知正治

後藤參議ヨリ伊地知副長へ返答、

拜承仕候、御淸安御連勤之御旨、奉欣賀候、陳者御院中事情ニ就云々御示被下候御旨承知仕候、素ヨリ段々御取調ノ筋モ御座候得共、猶爲念尊書並ニ宮島議官建言書共大臣殿並同僚へモ一閱仕置候、先者右拜酬迄如此御座候。拜具、

五月九日

後藤參議

伊地知副議長閣下

政府御改革續テ井上大藏大輔辭職候得バ、折角召集ノ地方官モ其甲斐無之、各自歸縣セントス。政府失信ノ罪免レ難シ。此上ハ何レカ其良策ヲ得テ其儘地方官ヲ抑ヘ、留メテ左院ニ於テ一會議ヲ興シ度、其旨板垣參議ヘ書狀ヲ遣シ、十三日早朝稻荷堀ノ西鄕參議宅ヘ參リ、面談、先ヅ第一ニ國會院設立並左院御改定ノ方法ヲ談ジ候處、至極同意ナリ。猶又今度大藏ヨリ召集ノ地方會議モ中止ニ相成、甚ダ不都合ノ次第ナリ。幸ニ今般本院ヘ國會御委任相成候得バ、直樣地方官ヲ留メテ左院ニ於テ會議被開候ハバ如何有之可申歟ト相語リシニ西鄕大喜ニテ御院ニ於テ地方官ヲ御引受ケ御一會被下候得バ仕合ノ事ナリ。且會議規則等モ御取調ニ相成居候得バ、後刻參朝正院ニ於テ地方官御請取ノ議御達ニ可及、其節正院ヘ規則原案御持參有之度旨申聞ニテ相別、直樣左院ヘ出勤之處、折節未ダ副議長病氣不參、其內正院ヨリ呼懸來候ニ付、大議官谷鐵臣代理出頭之處、伊地知不參ノ爲メ地方官引渡之儀、西鄕參議ヨリ發論無之、唯國會院取調稿案之儀相談ノミニテ、大不都合ナリ云々、他日板垣ヨリ承知致、可惜機會ヲ失ヒ、扨々殘念之至ナリ。其節正院ヘ差出タル、大會議規則三十二則ノ內、第一則ヨリ第五則迄左ノ通リ。

維新以來、庶政漸ク緒ニ就キ、綱紀稍々擧ルト雖ドモ、藩屏ノ餘習、東西風氣尚ホ未ダナラズ、政績亦均シカラズ、故ニ全國人民ノ代議人ヲシテ各其思フ所ヲ盡サシメ、公議輿論ヲ採リ以テ律法ヲ定メ、政化ヲ一ニシ、上下壅塞ノ弊ヲ去リ、民情暢達ノ路ヲ開キ、全國ノ人民ヲシテ天下ノ重キ各之ヲ擔當スベキヲ知ラシメント欲ス。然リト雖ドモ其擧重大、卒然之ヲ行フ、或ハ支吾ノ患ヲ生ゼン。故ニ先ヅ地方及ビ各省ノ奏任官ヲ召集シ、左院ニ於テ衆議ヲ盡シ、以テ將來治安ノ基礎ヲ建ント欲ス。各員上 聖旨ヲ奉戴シ、下一般ノ人民ニ代リ、協同一和公論精議シテ其抱負ヲ盡サンコトヲ要ス。

明治六年

大會議規則

第一則　大會議ハ各地方知事令參事各省奏任以上ノ官本院常在議官ヲ相會シテ事ヲ議スル所以ノモノニシテ、毎年一度必ズ之ヲ開クヲ以テ常例トス。臨時ノ會議ハ正院ノ命ニ從フベシ。但シ開院ノ期ハ前以テ正院ヨリ布告アルベシ。

第二則　大會議職制左ノ如シ。

議長一人

議院中ノ規則ヲ掌リ、議員ヲ總轄シ、同數兩立ノ衆議ヲ判定シ、垂問並ニ議員ノ建議ニ就テ衆議ヲ興シ、議員立論ノ旨趣ヲ熟考シ、其志ヲ達セシメ、凡ソ諸省ニ應接スル等ノ事ヲ掌ル。惟會議ノ席ニ於テ自ラ發論スルヲ得ズ。

副議長一人

職掌議長ニ準ズ。

幹事若干人

正院ソノ人ヲ選ミ上奏シテ之ニ任ズ、院中瑣小ノ事件ハ議長ノ指揮ヲ受ケ之ヲ決スルノ權アリ尤モ總會議ノ席ニ於テハ他ノ議員ニ異ナルコトナク平常ハ組分ヲ以テ事ニ任ズベシ。

書記長一人

幹事ノ中ヨリ兼勤シ記錄ノ事ヲ總管ス。

司計長一人

幹事ノ中ヨリ兼勤シ用度ノ事ヲ總管ス。

書記若干人

議長之ヲ選擧シ記錄ノ事ヲ任ズ。

司計若干人

議長之ヲ選擧シ用度ノ事ヲ任ズ。

議員若干人

本院常在議官及ビ各地方ノ知事令參事各省奏任官ヲ以テ之ニ充ツ、就中地方及各省ノ官ハ各其擔任ノ專務アリト雖ドモ、本院ニ入テ議事ニ列スレバ則一般ノ立法官トス。故ニ心ヲ公平ニ置キ、議ヲ正確ニ覓メ、四隅一治ノ化育ヲ期シテ苟モ恩光偏照ノ憂ナカランコトヲ思フベキナリ。然リト雖モ一縣一省ノ利病ヲ察スルハ其擔任ノ地ニ精キコト勢然ラザルヲ得ズ。宜ク辯論包負ヲ盡シ、思テ言ハズ、言テ盡サヾルノ患ナカランコトヲ要ス。

第三則　開院本日

天皇臨御三職及ビ諸省ノ卿出席シ開院ノ禮式ヲ執行アルベシ。

第四則　本日三職ヨリ

一　歳入歳費其會計ノ事

一　貧民授産並ニ貧院病院ノ事

一　國債ノ事

一　鑛山ノ事

一　道路橋梁ノ事

一　江河堤防ノ事

一　兵士徵募ノ事

一　軍費ノ事

一　鐵道鐵橋並ニ電信機燈明臺ノ事

一　墾田拓地ノ事

一　牧畜ノ事

一　驛遞ノ事

以上十二條ノ外本院常在議官ノ擔任スル六分課ニ關係ノ條件其他人民ノ疾苦ニ關スル事ハ之ヲ建議スルノ權アリトス。尙ホ垂問アリテ議スルハ此限ニアラズ。　天皇下シ給フ所ノ議案ヲ議長ニ附シ垂問ノ勅ノ意ヲ體任シ、公平至當ノ條理ヲ盡シテ協議スベキ旨ヲ宣シ、然ル後會議ヲ開クベシ。

第五則　開院ノ後議長垂問ノ議案ヲ會議ニ附シ答議決定ノ後議長之ヲ正院ニ出スベシ。

其後副議長出勤之處、時日引移（遷延）ノ爲メ、議論モ替リ、御改革ノ際ナリ、一旦盡ク地方官歸縣爲致候方可然旨ニテ、十六日三條太政大臣方ニテ、進退之儀評決ニ相成リ、伊地知副議長谷大

議官ヲ御召寄ニ相成リ、地方官ヲ歸縣セシムル旨、御諭告ニ相成リ、十八日地方官ヲ太政官ヘ御呼立ニ相成リ、演說ニ被及候事、

演說ノ語此ヲ濫觴トス

太政大臣演說ノ覺ヱ

各地方官集會ノ折柄ニ付左之趣旨及演候

各地方之事務、實際精究之上、近々釐正周備ヲ求ムベキ御趣旨ニテ、既ニ今般議會ニ於テ決定セシ個條ハ、奏進之上、允裁ヲ受クベシ、一體各地方官ノ議會ハ、民務之便宜ヲ實地ニ徵考スル緊要之事ニテ、政理上得益少シトセズ。故ニ今後議事之體裁ヲ撰定シ、左院ニ於テ每歲之ヲ開クベシ。其規則等ハ決定之上、頒布可及ト雖モ、今般太政官職制並事務章程潤飾之上御發令相成、右御趣意ノ綱領ハ既ニ勅旨ニテ略承知モ可有之候得共、辛未七月制定之官省位置職員權限各其序ヲ得ルト雖モ、實地現務上ニ於テ、各省委任ノ權限ヲ充擴シ、各自其規模之皇張ヲ期望スルヨリ、其末弊或ハ彼此權力相軋スル勢ヲ生ジ、動モスレバ理論ニ空馳シテ、實際之事業緩急前後其適度ヲ失ヒ、一致平均之準ヲ得ズ、故ニ太政官之職制章程ヲ潤飾シ、各省ノ權力ヲ平準シ、國勢民力ヲ審ニシテ經理事業之緩急ヲ定メ、歲入歲出ヲ量テ百般政務ヲ議行セシメ、以テ前件ノ弊ヲ釐正セントノ趣旨ニテ、[illegible]縣ノ體裁ニ至テハ、目下實務ノ妨碍アツテ更正ヲ加ヘザルヲ得ザルノ外ハ、左院[illegible]開ク迄都テ從前ノ通據置更ニ分合附則ヲ爲サバルベシ。各地方官能ク此旨ヲ體シ當務一層勉勵可有之事。

井上大藏大輔澁澤少輔（三等出仕力）之辭職願濟ニ相成ヤ、大藏其首領ヲ失フ、仍テ參議大隈事務總裁被仰付、大藏ヲ主宰シ、更ニ正院ヘ會計部ヲ設ケ、而シテ六月九日ニ歲出入ノ豫算計算表ヲ達シテ、財政之有餘アルヲ布達ス。

地方官ノ歸縣スルヤ、左院實ニ可惜ノ機會ヲ失ヒ、昨年七八月之間ニ一度其機ヲ失フ、今復再失ス何ゾ地方會議ヲ開クノ困難ナルヤ。然ルニ本院章程漸ク御下問ニ相成、副議長ヨリ無異存旨回答、六月二十四日職制章程御下付ニ相成リ、左院議官ヲ以テ常在議官ト爲シ、行政諸省幷ニ地方官ヲ以テ兼任議官ト爲シ、臨時國會ヲ開ク程規ヲ定メ、平日ハ本院ハ國憲民法ヲ編纂スルヲ常職トスルノ章程ヲ付與セラルル。此時伊地知氏國憲ハ御國體上萬世不拔ノ皇基ヲ安定スベキ治國ノ要領ナレバ、古今ノ憲法ヲ斟酌シテ大ニ編纂セントス。先ヅ議官松岡時敏ト小官トヲ以テ之ニ充ツ、民法ハ我邦古來習慣ノ美事ヲ取テ之ニ佛國ノ民法ヲ斟酌シ編纂スルヲ可トス。然ルニ一日正院ヨリ內議アリテ伊地知副議長ヨリ後藤參議ヲ推擧シテ左院事務總裁ヲ兼任セシム。後藤總裁ノ左院ニ來ルヤ、今般左院ニ於テ編纂スル國憲ハ所謂佛國ノ國憲ニ則リ、刑法治罪法稅法商法訴訟法ノ五法ヲ編纂スルナリトサシム。而シテ伊地知氏之負擔スル處ノ帝室王章ナルモノハ索然トシテ其踪影ヲ失フ。然ルニ

一日伊地知氏突然議長職ノ辭表ヲ上申ス。議官一同何等ノ事タルヲ知ルモノナシ。是ヨリ左院ニ出頭セズ麻布ノ邸内ニ潛居セリ。

七月中旬大久保大藏卿ノ岩倉全權大使ニ先チテ歐米ヨリ歸朝スルヤ、參議ノ命アリ辭スルニ大使ノ歸朝ヲ待テ之ヲ拜セント、余左院ノ近況ヲ談ジ院中ヲ固定セントス。仍テ大久保氏へ贈ル所ノ書左ノ如シ。

前略陳者左院御創立以來兩度ノ改革アリト雖モ、而シテ未ダ立法ノ權ヲ有セズ、今ヤ閣下御歸朝ニ付宜シク今日ノ時勢ヲ熟察シテ至當ノ議院ヲ起シ、立法行法司法ノ三大權ヲ平均シテ以テ國法ヲ一定シ、廢藩置縣ノ全局ヲ御結了有之度、內務創立ノ議ハ別ニ具スル所アリ。今茲ニ贅セズ。因テ昨年上申スル所ノ國憲論一篇御參考ノ爲呈上仕候。委細御面晤ニ相讓度御歸朝ノ際御混雜奉察候得共御寸閑御示被下度奉伏願也。頓首再拜

七月二十八日　　宮島誠一郎

大久保老台閣下

其後大久保ヨリ返翰左ニ、

霖雨不堪鬱然候得共彌御安祥被成御座奉拜賀候、然者過日ハ御光來被爲下由ニ候處、折柄外出中御殘多奉存候、御書中之趣委曲承知仕、明三日差支無御座候間、四字比ヨリ御來枉被成下度奉願候、此段乍延引御報旁早々書外拜接ニ讓候。頓首

八月二日　　大久保

宮島君

大久保ヨリ返翰ノ來ルヤ、八月三日午後ヨリ參リ面會先ヅ歐米巡回中之景況ヲ談話、唯々外國ノ富强ノ形況ハ實ニ意外ニ出テ、驚キ且ツ歎ズル而已無他辭云々、且ツ大禮服制取調之儀出來之爲メ歐行中其禮式モ無間缺隨分到處賞讃セラレ、就中ビスマルク宅ヘ招請之時ハ別テ都合ニモ相成リ、偏ニ御丹誠云々等ノ答謝アリ。夫ヨリ左院ノ談話ニ相移ル談話ノ顚末左ノ通リ。

辛未ノ春薩長土三藩ヨリ藩兵ヲ朝廷ニ獻ジ朝權ヲ確固ナラシムルヤ、續テ土州ヨリ四民平均ノ論ヲ發シ終ニ福井彦根米澤等ノ諸藩協議シテ　朝廷ヘ相願ヒ、士ノ常職ヲ解キ祿券ヲ與ヘ、文武ノ業ヲ廣ク諸民ニ布キ渡ス旨藩內ニ施セリ。然ルニ此際封建郡縣二途ノ論紛紜トシテ薩藩ハ在朝諸氏ノ外ハ專ラ封建ノ勢有之樣、傍ノ諸藩見做スモノ多シ。當時高知藩大參事板垣氏頗ル慨歎シ、封土奉還ノ大業ハ薩藩ヨリ嚆矢相成タル程ノ實績有之候テ、而シテ猶今日ノ物議アル甚ダ遺憾ナリト、當時出京ノ西郷大參事ニ告ゲ、此上郡縣ノ實功不相立レバ、第一朝廷御不信ノ名ヲ永ク天下ニ流布スベシ。故ニ此際先ヅ全權ノ才ヲ擧ゲテ國家ヲ委任スルニ如カズト、兩人商議シ相共ニ木戶氏ヲ推テ、　朝廷ニ勸ムル事大久保氏モ、亦大ニ盡力アリ

シ處ニテ、我輩ノ深ク知ル所ナリ。然ルニ木戸氏獨リ時艱ニ當ルヲ肯ンゼズ、亦西郷氏ヲ推擧ス。遂ニ兩氏參議ヲ拜命シテ廢藩置縣ノ申令ヲ布ク、是維新以後ノ一大變革ナリ。無程大隈板垣亦參議ニ任ゼラル、此際是非トモニ向後ノ政理人心御取リ治メ可有之ト企望候處、豈料ンヤ岩倉木戸大久保諸公等俄ニ外國條約延期ノ大使トシテ歐米派出ニ相成候事、蓋シ深意アルベシ。初メ我輩板垣ト四民平均ノ藩制ヲ改革スルヤ、此ヨリ漸々全國ニ及ボシ、民智開ケ民權立テ而シテ後廢藩モ可ナリト。然ルニ俄然トシテ廢藩而シテ未ダ政令ノ及サザルニ　朝廷ノ半ヲ擧ゲテ渡航スル果シテ是レ何等ノ御目的ニ出ル歟。此レ若シクハ目下困難ノ時勢ヲ避ケテ海外ヲ一察シ、歸朝ノ日大ニ更革スルノ策ナリト、世論洶々萬一如此ナラバ則チ恐ラクハ實著ノ政理ヲ棄テ而シテ海外ノ風ヲ摹倣スル尤モ不可然ナリト。各自胸中ニ一種ノ拮抗力ヲ發出ス。抑々郡縣ノ制ヲ立ル政府素ヨリ此政理ヲ審ニスルニ非レバ綱目ノ條理擧ル能ハズ、實功ヲ修ル實ニ難シ、苟モ施政繁劇ノ際ハ別ニ議政ノ一院ヲ設ケテ政府ノ腦髓ヲ助ケザレバ、細大施行ノ事務其宜ヲ得ベカラズ。此レ議政ノ法ニ本ヅイテ左院御設立アル所以ナリ云々『以上書綴リ差出ス』

近況ヲ委細相談、結局議政行政ヲ分チテ三大政權ヲ分チ、以テ施政無之テハ御國體相立間敷旨相談ニ及候處、大久保モ根元ヨリ話有之、實ハ使節派出先ヘ御用有之ニ付早々歸朝之旨御呼戻申來、夫ヨリ大使ニ先チ二三個國ヲ殘シ不取敢歸朝候處、已ニ御改革モ相濟ミ候由ニテ、態態歸朝ニ對シタル御用モ無之、當時休息中政府ノ御模樣承知不致、唯々處々方々或ハ徵兵ノ爲トカ、或ハ徵租ノ爲トカ一揆蜂起是ハ如何ニモ源因之有之候事歟、此等ハ此儘ニ御差置ニモ相成ルベシ。但シ三大權施政云々之儀ハ政府獨リ了解スル所ニテ、未ダ地方官等ニ到テハ何等之理由カ不承知之人數多ナルベシ。此等ハ漸々施行未ダ遲シトカ爲サズ、唯政府之令朝令暮改諸規則繁密ハ必ズ人民ノ所不堪ナルベシ。不日參朝ノ上ハ篤ト勘考御評議ニモ可及、時ニ伊地知ノ辭表ハ何等ノ趣意ヨリ出ル云々ノ問アリ、小官亦未ダ副議長ノ心底ヲ知ル能ハズ、唯是迄ノ成行ニテ按思候時ハ、今般左院ヘ御渡之章程中、國憲編纂云々充分ニ　王室ノ典章ヲ吟味ノ約束ニ有之候處、事務總裁新任以來、俄ニ佛國ノ五法編纂ニ變易セシニ源因スルモ不可知旨陳述ニ、大久保曰ク正治ノ辭表ハ必ズ此ナラント、又曰ク今般新タニ暑中休暇ヲ賜下セラルルハ歐洲ノ通ニテ頗ル好例ナリ、此節　天皇箱根ニ遊ントス此ナラント、又曰ク今般新タニ暑中休暇ヲ賜下セラルニ遊ントス此ナラント、又曰ク今般新タニ暑中休暇ヲ賜下セラルルハ歐洲ノ通ニテ頗ル好例ナリ、此節　天皇箱根ニ遊ントス此ナラント、又曰ク今般新タニ暑中休暇ヲ賜下セラル行幸中ナリ。余モ亦富山ニ登リ琵琶湖

九月五日大久保ヨリ書翰來ル。

彌御安康被成御座奉拜賀候、然者過日ハ御光臨被成下御殘置之御紙面拜見仕候、明六日御差支無御座候ハヾ第四字ヨリ御入來被下度奉願候。先日ヨリ種々多忙ニテ乍存御答延引大

失敬御高量所仰候、此段早々如此御座候、拝答敬白

九月五日

大久保拝

宮島君閣下

右ニ付六日午後ヨリ參リ、内務新設ノ事ヲ論ズ。此事昨年同氏中途歸朝ノ折結約致候儀ニテ、當時ノ建白書ハ再度洋行歸朝ノ日迄見合呉候樣約束ニ付、此度同氏ニ直樣取扱相願、同氏大憤發屹度擔當御評議ニ可及旨決答有之、且富山ノ雪ヲ掬シ琵琶湖ノ月ヲ觀住吉ノ松ヲ助クル云々佳話アリ。松ノ話ハ名歌アリ

九月十二日大使岩倉公ノ歸朝スルヤ、在朝ノ參議ヲ銘々ニ自宅ニ招キ其意見ヲ問ハル。然ルニ此節西鄕參議ハ青山ノ別莊ニ臥病久シク參朝無之、其他諸參議各自支離ノ姿ニテ、倦怠萎靡ノ色ヲ露シ、而シテ各々歸朝大使一派ノ所見ヲ窺モノアルニ似タリ。是ヲ要スルニ五月ノ潤飾少シク行政諸省ノ弊ヲ撓メ過ギテ、却テ根本ニ其害ヲ生ジ、支體分離ノ姿ト相成リ、前途ノ針路何處ニ傾向スル未可知也。

十月二日岩倉右府歸朝後初テ參朝、木戸參議ハ半身不隨中風ノ症ナリトテ參朝無之、政府自是騷然トシテ穩ナラズ。物議紛々仍テ左院ニ於テ地方秋ノ會議ヲ開キ、政理ヲ提撕セザレバ今日ノ病實ニ不治ノ症ニ歸スベシト。此日左院ヨリ直ニ板垣ヲ訪ヒ、意見ヲ呈シテ曰ク國憲創立國會開議ノ事ハ小官之ヲ大久保ニ說ク、因テ此大使歸朝ニ際シ斷然地方會議ヲ起シ、國本ヲ確定スルノ憲法ヲ設立スベシ。且ツ内務新設ノ事ハ已ニ建言書ヲ迄致セントス、大久保之ヲ諾スル昨年ノ約ノ如シト、板垣曰ク余此頃少シク意見アリ、中央政府ニ最少シ聚權セントス。會議論ハ第二著ト相成タリト、余此言ヲ聞テ平生ノ素論ニ反對シ、歷制主義ニ出ルヲ怪ミ、深ク其蘊奥ヲ極問スルニ、西鄕ノ病ヲ問テ征韓ノ事ヲ約スル大旨ヲ内聞セリ。余大ニ愕然タリ。内政未整ニ外征ノ事ニ及ブ、實ニ大難事且舊時封建ノ兵制トモ違ヒ、徵兵令モ布令アリ。今又俄ニ藩兵ヲ用ユル如キ實ニ不堪驚難。去リナガラ已ニ西鄕結約之事無可奈何、小官ハ唯國憲論ハ素志ナリ、外征之事ハ未ダ一點モ腦裏ニ無之、先生宜シク詳思過ツコト勿レト板垣ニ陳述ス。

四日左院ヘ出頭國會創立ノ議案ヘ議官一同連印致シ、後藤總裁迄差出ス。

十二日正院ニ於テ内務省ヲ創立ノ御評議相始、十三日大久保大藏卿副島外務卿兩氏參議ヲ命ゼラレ、此日ヨリ内閣御用之都合有之諸省長官面諾一時ヨリ三時迄ト被仰出候事。

十四日内閣大議論相始リ夜ニ入ル。

十五日内閣大議論、今日在朝參議ト大久保參議ノ議論相分ル。兩日トモ木戸參朝無之。

十七日三條殿岩倉家ヘ被參、夜半西鄕參議ヲ自宅ヘ御呼寄御評議天明不寢。

十八日三條殿逆上激發危篤、翌十九日岩倉公代理被命御請ニ相成ヨシ。

十九日大久保參議ヨリ書翰左十七日ノ返答

過日者御書翰被下則御回答可申上候處、彼此取紛レ失敬仕候、御免可被下候、扨御咄之儀有之御出可被下候ニ付、閑日申上候旨承知仕候、兩三日之間ハ差支申候ニ付、來ル二十三日朝第八時ヨリ御來駕被下候得ハ仕合ニ御座候、此旨御答迄如此御座候、頓首

十月十九日　　利通

宮島樣

二十一日大臣殿御病氣、十九日ヨリ御開相成候旨承知致シ御見舞參上。

二十三日大久保ニ到リ篤ト心事ヲ談ジ、近來ノ政府上ノ御混雜實ニ案外ナリ。內政未整ニ外征素ヨリ不可爲、御意見如何ト尋問セシニ、大久保曰ク、此節思案中ニ付國事之儀御答難申云々、小官曰ク素ヨリ御答無之時ハ心事ヲ談ズル無用ニ屬セシナリ。但シ小官ノ鄙見ハ如何御聞込ニ候哉ト詰問ス、大久保曰ク御意見之處ハ敬服感服ナリ。此度ノ事ハ三條殿等ニ御責メ申ス事實ニ御無理之次第ニテ、御發病ハ無餘儀事ナリ、過日御咄之伊地知進退之儀ハ委細右府ニ談ジ置候ニ付、不日何トカ可有之旨申聞ナリ。余初テ大久保參議ノ意底征韓ノ不可ナルヲ察知シ、內政ヲ整理スルノ益々急ナルヲ知ル。

此日諸參議征韓ノ可不可ノ兩論ヲ

天皇ニ奏上シテ御親裁ヲ仰グト云々。

西鄕參議辭表進達、桐野篠原此夜西鄕ニ參リ暴擧セントス。西鄕之ヲ諭スト云フ。

板垣副島後藤江藤、各副島宅ニ集會シ病氣ヲ以辭表進達。

大隈大木ハ大久保同論ニテ依然在職。

二十四日西鄕脫然東京ヲ發シ鹿兒島ニ歸ル。

此日正院ハ大木參議一人出頭。

二十五日暫時左院出勤、三條殿へ御見舞最早御平快ノヨシ、猶森等ニ就テ此間ノ形勢ヲ尋問スルニ、當月初旬ヨリ政府追々發論、右ハ洋行大使歸朝之處、政府ニ於テ專ラ西鄕參議征韓ノ議ヲ發シ、板垣同論ナリ。西鄕若シ此議行ハレズバ職ヲ辭スルト云フ。十三日大久保副島參議ヲ拜命シ、十四日十五日征韓ノ緩急ヲ論ジ大議論ニ相成リ、大久保大隈兩人十五日ニハ征韓之不理ヲ說テ引去、十七日ニハ三條殿岩倉家へ被參餘程御激論、夜半西鄕參議ヲ御招ニテ天明迄御評議、翌十八日激症ノ逆上ヲ發シ、十九日ヨリ岩倉殿代理被致、二十三日迄廟議紛紜諸參議或ハ辭表或ハ引籠今日未ダ風波鎭靜ニ到ラズ。

午後一時半板垣ヲ訪、面談而來ノ景況ヲ尋問候所一昨日ハ後藤江藤一同副島へ集リ評議、事實ヲ演說シテ辭表ノ時ハ事件柄外國ニ差響甚ダ不安ナリ。仍テ何トナク病氣ヲ以テ辭職セント一

同決議辭表進達、然ルニ西郷ハ辭表ヲ出シ切リニテ直様陸路發足歸縣、陸軍省兎解、桐野篠原等同斷脫走ス。初メ西郷ノ征韓論ヲ爲ス急ニハ目的ヲ立テ徐ニ可謀トノ論、兩端相分レシニ、西郷ト共ニ急擧ヲ謀ントノ同論ニ相成シニ、三條公モ御同意ニテ、海陸軍ヲ率キテ出征スベシト相成リケレバ、岩倉公モ初メ同論ノ處、一日俄ニ變議、仍テ三條ヨリ頻ニ激論遂ニ激病相發シ、岩倉公代理セラル。遂ニ大久保同論征韓不可爲ノ論ト相成ル。諸參議辭表根元ハ條公ノ御病氣ヨリ大事瓦解致セシナリト板垣ノ話ヲ聞テ唯々浩歎スル而已。余此間ニ一言ヲ發セザルナリ。此ノ征韓論無クハ國憲モ無滯局ヲ結ブ疑ナシ。嗚呼可惜、

此日　天皇後后五時頃ヨリ赤坂假皇居ヲ　御發輦ニ相成、太政官代ヘ　御親臨黜陟被仰出、西郷板垣後藤江藤ノ參議ヲ免ゼラレ、勝寺島伊藤ニ參議ヲ命ゼラル。木戸ハ病氣ニ付私宅ニ於テ政務ニ參ズベキ旨被仰付、大久保參議一人ニテ擔當、岩倉公太政大臣代理ニテ此進退モ相濟ミ、大隈大木兩參議其間周旋セラルナリ。

二十八日左院出勤大久保參議ヘ書狀相添ヘ內務新設ノ議案ヲ進申屹度領掌之旨申來。

三十日岩倉公ヨリ伊地知副議長ヲ御呼立ニ相成リ抱負御聞取相成ル。

十一月二日大久保參議面會、然ルニ伊地知一昨日岩倉家ヘ參リ出勤可致旨答タルヨシ、此旨承知可申旨申聞タリ。此言ヲ聞テ數月ノ配慮モ少シク安氣セリ。

十日左院ヘ出勤、本田議官ニ申シ合セ岩倉公ヘ參リ、本院振興並ニ伊地知出勤ノ運ビヲ熟談ニ及度、議長代理伊丹議官迄相談ニ及候處、同氏昨日伊地知ヘ參リ出勤ノ儀催促ノ處、何分此儘ニテハ出勤致シガタシ、見込ノ件御採用ノ節ハ必ズ出勤ニ可及旨ヲ以テ件々ヲ書付ニシテ之ヲ岩倉ニ差出シ呉候樣申聞ニテ、右ノ書付今朝不取敢岩倉ヘ持出シ、面談ハ明後朝ト相約シ候ヘバ、其模樣ニ因テ參向可然旨伊丹ノ話ニ因リ之ニ從フ。

今日內務省ヲ被置候段御布令、地方人民ノ疾苦初テ可救之道ヲ得テ不堪欣躍之至、卽夜左院ニ於テ取調タル國務省ノ書類大久保參議ヘ相添ヘ相送ル。

十二日伊丹代理岩倉ヘ參リ、伊地知ノ見込御採用相成速ニ出勤ノ運ニ相到候樣岩倉ヘ申込候、精々盡力ノ旨岩倉公引受ラレ候旨承知。

十五日伊地知副議長久々ニテ出勤、本院一同慶祝。

二十五日伊地知副議長松岡議官正院制度御取調掛被仰付、是ヨリ追々內務職制取調、左院職制章等モ改定ノ評議モ制度局ニ於テ始ル。正院ヨリ寺島伊藤ノ新參議兩人兼勤セラレ候事。

明治七年一月十七日、舊參議連署ノ書ヲ以テ突然民選議院論、建白セリ。後藤舊議長自ラ建白ヲ携帶シテ左院ニ來リ、切ニ形勢ノ急ヲ說ク、伊丹松岡高崎諸議官及小官應接ニテ之ヲ受理

ス。十八日議官一統會議ノ上正院へ上陳セリ。十九日副島種臣ヲ呼出シテ建白書上陳ノ始末ヲ聞ク。此ヨリ先キ十四日喰違ノ變アリ。續テ佐賀ノ亂起ル。

二月十二日左院御革正被仰出候テ職制事務章程御渡ニ相成リ、是迄ノ左院ヲ太政官中ニ御繰込ニ相成リ候テ、又々以前ノ如ク正院ノ顧問ニ備ラレ、六課ヲ分配シテ內務外務財務兵務法制諸業ノ事ヲ掌ラシム。其職制章程中ノ最モ重シトスル者ヲ左ニ提起シテ記載スル左ノ如シ。

左院職制並事務章程

上裁鈐定スル所ナリ能ク之ヲ守リ其程限ヲ愆ル勿レ

明治七年二月十二日

太政大臣　三條實美　花押

議長職制中

正院及各省並國會議院等ニ對シ本院ノ決議ヲ申明スルヲ得云々

十五條章程中

第一條　本院ハ議政官ニシテ正院ノ輔佐ト成リ其垂問ノ事ヲ議スル所ナリ云々

第二條　凡テ制度條例ヲ創立シ或ハ成規定則ヲ增損更革スル事ハ正院ノ垂問ニ依テ本院之ヲ決議シ以テ上奏スベシ。

第三條　一般ニ布告スベキ諸法律制度ハ正院ヨリ必ズ先ヅ本院ニ下シ其利害得失ヲ評論セシムベシ。

第七條　議事ニ當リ行政ノ官員ニ諮詢スベキコトアルトキハ正院ヘ乞テ其人ヲ出席セシムベシ。

第八條　議事ニ付取調ノ事件アレバ議官ヲ諸省ニ達シ又時トシテハ地方ヲ巡回セシムベシ。

第十一條　地方官會議ノ時正院垂問ノ議案ヲ申明セン爲ニ本院議官ヲ其會議所ニ遣シ趣旨ヲ審詳辯論セシムベシ。

第十二條　人民ヨリ支配官廳ニ對シテ起セシ訴訟アルトキハ正院ヨリ之ヲ本院ニ下シ裁判セシムベシ。

第十三條　正院ニ於テ國憲ヲ議シ或ハ職制章程等ヲ創立シ又ハ之ヲ增損スルコトアレバ、特命ヲ以テ本院議官ヲ選任シ其事ニ與リ議セシムベシ。

二月十四日六課分別正院參議ヨリ布達有之左ノ通

六課分別本書ノ通御施行可有之候事

二月十四日

伊藤參議印

寺島參議印

伊地知副議長殿

内務課　戸籍病院貧院貧民救助獄舎徒場巡査道路橋梁舟車驛遞電信書籍免許等及ビ神社寺院學校教法音樂等ニ關スル方法規則ヲ議スルヲ掌ル。

外務課　條約接待貿易等ニ關スル方法規則ヲ議定スルヲ掌ル。

財務課　諸稅則並ニ出納ニ關スル條件商賈相互ニ貿易賣買諸會社規則併貨幣産物國債等凡テ其增減出入ニ關スル方法規則ヲ議定スルヲ掌ル。

兵務課　海陸軍律諸軍器團營城隍等ニ關スル方法規則ヲ議定スルヲ掌ル。

法制課　民法訴訟法治罪法刑法商法及ビ官職位階儀仗服飾禮式等ニ關スル方法規則ヲ議定スルヲ掌ル。

諸業課　農工商三業之ニ屬スル雜業並ニ漁獵採礦開墾治水諸製作等ニ關スル方法規則ヲ議定スルヲ掌ル。

此日大久保内務卿河野權大判事野津井田山田ノ三少將ヲ率キテ九州ヘ鎭撫トシテ發行、十七日島津左府ヘ　勅書御直渡相成　薩州ヘ發行ス佐賀縣叛逆、十九日兇徒征討被仰出、東伏見宮征討總督被命、山縣陸軍中將伊藤海軍少將等出發、官軍勝利不日平定スベシ、佐賀兇徒ノ黨或ハ征韓論民選議院論封建論數派相混ジテ亂源ト相成ル。

左院職制章程並ニ分課御達ニ相成、十七日太政官中ヘ移轉繰込ニ相成、而シテ前ニ所謂國憲ナル者ハ章程十三條ニ正院ニ於テ國憲ヲ議ス議セシム云々、加之副議長制度御用ヲモ兼任セラルレバ副議長ヨリ正院ヘ二月二十八日伺左之通。

謹デ按ズルニ憲法ハ邦家ノ基礎ニシテ治國ノ要領タリ、上下萬世之ニ依テ維シ之ニ賴テ持スル所以ノ道ニシテ之ヲ建ルノ方其宜ヲ得ル古先賢哲又甚ダ難シトス、況シヤ臣等ノ不肖敢テ輕議スル處ニアラズ。然リト雖ドモ治國憲法ノ大本定ラザレバ萬緒綱目秩然併擧スル能ハズ、重大ノ典章モ他日ノ變革ヲ疑擬シ、人心動搖シテ永久確守ノ目的ヲ失フベシ。是國政上許多損害ト成ルノミニシテ維新ノ始メ五個條ノ御誓文ハ萬世ノ國憲ハ勿論ニ候ヘドモ、譬ヘバ御國體上萬世不拔ノ皇基ヲ奉ズベキノ如キハ、御誓文ニ出サヾルコト能ハザルノ類ニテ、充全ノ法章ニ備ラザル御闕典ノ姿ニ有之、仍テ上下ノ便宜ヲ通考シ、古今ヲ斟酌シ、所謂根元律法ナル國憲御確定被爲在度奉存候。右ニ付テハ一日萬機ノ御政務多端ノ御儀ト奉恐察候條、本院ニ於テ議官數員御特撰被下候ハヾ見込ノ條々編纂イタシ聊御見合ノ爲メ上陳了仕候也。

明治七年二月二十八日

國憲編纂起源

右一篇上奏相成候處爾後廟堂御多事漸ク日ヲ經ルコト七十二日ニシテ左ノ通
伺之趣御聞屆相成候條編纂ノ上上申可致事。
但シ懸リノ議官ノ儀ハ本院ニ於テ撰定シ名前可屆出事
五月十日決裁

副議長　伊地知正治

國憲編纂起源　坤

國憲編纂宮內省創設ノ大意

明治七年五月御裁決ニ因テ國憲編纂ヲ左院議長伊地知正治君ニ擔當被命同人從事セシニ、八年元老院創立ノ際ニ當リ、同人辭表進達、而シテ編纂亦タ中止セリ。然ルニ九年暑中休暇ノ頃三條相公北海道巡廻ノ留守代理トシテ岩倉右府政務ヲ管掌セラレ、元老院ニ達シテ更ニ國憲編纂ヲ命ゼラレシナリ。然ルニ此編纂草案ハ政府ト人民ニ關スル分ハ元老院ヨリ內閣ニ進達シ、帝室ニ關スル分ハ起草ノ儘右府ノ手許ニ差出セリ。而シテ右府更ニ宮內省ニ建言シ、他日廟堂ニ於テ大臣ヲ選定シ、國憲ヲ論定セラルベシ。當分儀制局ヲ置テ考證ト相成ルベキ古書ヲ穿鑿シテ一史料ヲ作ルベシトノ意見ナリ。伊地知氏宮內一等出仕ヲ命ゼラレ、此總轄ヲ奉ジ、余モ亦タ御用掛ヲ命ゼラル、伊地知氏前後ノ事情ヲ參酌シ此編纂ノ全部ニ着手セズ。現今內廷ノ事ノ急ニスベキモノ數件ヲ拔萃シテ參考ニ備ヘント。

諸規取調所御用掛

明治十二年十二月

宮島誠一郎

謹デ惟ルニ、我　祖宗天祖ノ訓誥ヲ承ケ、國ヲ玆ニ建テ、子孫相繼ギ一百二十餘代、二千五百數十年ノ久シキヲ經タリ。其間汚隆ナキ能ハズ、皇綱紳ヲ解キ、政權武門ニ歸シ、政治紀ナキコト凡ソ六百年、天運循環維新ノ運ニ膺リ、天下ノ牧伯土地兵馬ノ權ヲ還シ、四海ノ內　一君ニ統ブ、豈ニ千載ノ一時ナラズヤ　今上卽位ノ始メ、首トシテ神明ニ誓ヒ、萬機公論ニ決スベキヲ以テ、其八年四月ニ至テ始テ元老大審ノ兩院ヲ置キ、立法ノ源ヲ拒メ、審判ノ權ヲ鞏フシ、又地方官ヲ召集シ、民情ヲ通ジ、公益ヲ圖リ、漸次ニ國家立憲ノ政體ヲ立ントス。此詔書タルヤ、從來ノ舊制ヲ改メ、人民ヲシテ各其權利ヲ占有セシムルノ叡旨ニシテ、千歲ノ國體將ニ變更セントス。又勅ヲ元老院ニ下シ、曩ニ左院ニ草スル所ノ國憲ヲ再議セシム。此數件ヤ、皆君民ノ權ニ關シ、將ニ立憲ノ地位ニ赴ントス。今　聖詔漸次ヲ主トストモ、億兆中或ハ躁進ナキヲ免レズ、既ニ各地方ノ如キハ大小區中會議ヲ開キ、論者動モスレバ民選議院設立ノ論ヲ主張ス。夫レ人心常ナク時勢圖ルベカラザルハ今古ノ通議ナリ。此際路ニ當ルモノ深ク謀リ遠ク慮リ、以テ將來ノ基礎ヲ定メザルベカラズ。然レドモ物ニ本末アリ、事ニ順序アリ、況ヤ我國體自ラ他邦ノ地ニアラズ。仍テ方今ノ急務ヲ察スルニ、先ヅ帝室ノ制規天職ノ部分ヲ定ムベシ。是ニ於テ臨時一局ヲ設ケ、儀制調査ノ委員ヲ選ミ、博ク群籍ヲ蒐集シ、　祖宗ノ舊規ヲ考證シ、外國ノ成例ヲ參酌シ、帝位繼承ノ順序、帝室歲俸ノ諸制ヨリ、以テ曩ニ式部寮ノ申牒スル儀式編纂ノ事項、其他宮禁ノ例規トスベキモノニ至ル迄、皆之ヲ調査起草シ、以テ　上裁ヲ請ントス。如是ハ帝室ノ基本大ニ定リ、永ク尊榮ヲ保ツベシ。君權已ニ鞏ケレバ民權其度ヲ踰ユルコトナク、上下相賴リ國家以テ安シ。遂ニ立憲爲治ノ地ヲ爲シ、福祉ヲ萬世ニ開カン。是儀制調査局ヲ設ケント欲スル所以ナリ。謹デ議ス。

明治十一年三月

右大臣岩倉具視

憲法

國號　大日本　日本
國體　太祖訓誥　君主專政　君民共治
三種神器
太上天皇　法皇　贈太上天皇
卽位　踐祚　卽位宣誓儀式
尊號　天皇　皇帝　天子　壽明樂美御德
改元　一代數改一代一元　不用元號稱紀元何年
諡號　史記諡法　漢籍抄出　美字　地名院　國風諡號
皇上神聖不可侵行爲不問然
國政責任　皇上　三權分立　行政責任　在大臣或諸卿
法律確定布告　布告書式
立法院開閉

陸海軍ヲ總統シ便宜指揮ス
行政權統理
諸官吏任免　立法裁判官終身　武官以法律定之　民選議院以投票擧之
講和決約　變國境　費國財　付立法官會議
大赦　特赦
貨幣紙幣制造　聖照寫之
女帝　男統　女統
帝位繼承順序　順序變更之時付立法官會議
皇帝皇族成年
國敎
攝政　皇太子　皇后　皇太后　親王　諸王　華族
攝政權利及宣誓
帝家傳來不動產　不可賜與人　現今官林官山之內充之
在世中御所得不動產　賜與自由
帝家動產

國憲編纂起源

帝俸以法律定之　現今全國歲入十分一　舊幕府領地納高ヲ金ニ積リ幾分充之
各國歲入ト帝俸トヲ比較シ大邦歲入ヲ算シ充之

皇居離宮建築修繕　臨時從大藏省出金

皇太后、皇后、皇子女、帝俸共通異同

皇太子納妃則定歲俸

裁判以帝名宣告

等親制度

爵位勳章貴號特權

諸臣受外國勳章貴號或養老銀必待上裁

冊立皇后時附立方官會議

皇子任官

皇族納妃待上裁而後決

皇族任官

皇族之下置王族　慶明治元年布告

皇族犯罪裁判所

親王內親王諸王女王品級

規則

敬語　大皇帝　陛下　行幸　行啓

尊諱　仁尊　何尊

皇族御諱　及官名

國璽御璽　守璽官　官印裁可御印

國書宣旨位記勳記御委任狀

勅旨令旨

御服　大小禮　平常　喪服

聖上忌服　御心喪

乘御　馬車　馬

御劍　歷代御傳來　當今御佩用

嫡庶皇子女權利禮遇

太皇太后皇太后皇后　中宮　國母

准后女御女官　現今呼名可廢
皇太子妃
親王諸王妃名稱
妃嬪有無　司法省近稿　民法草案廢妾ノ意見
實子養子養母准母　猶子現今廢止
皇子女降誕及命名
外行內幸　其間大臣責任
諸祭祀　大嘗祭會　宗廟賢所　神武陵　官國幣社祭
式年祭　年祭　合祭
國史
皇統系傳　神代人皇區別　代數　南北正統
飯豐天皇　弘文天皇　神功皇后
皇后妃嬪採擇制規　妃嬪俸給
人君學術
皇太后皇后御服
宸翰書式　題歌詩歌
皇子女教育

內親王女王降嫁後對遇
親王諸王賜姓列人臣或臣家相續後對遇
皇族服制
皇族牒籍
皇族歲俸
四親王家及隱居宮
親王諸王賜名　并宮內省布達
皇族凶事宮內省布達　音樂停止
諸王子大臣位次
女官服制　并位階
忠孝節義者賞賜
皇太后皇后親戚及御外戚接遇
遊獵猿樂　劇　女樂　伶樂
皇族勅任官學者臨時招宮中
創業功臣　不論在官無官　臨時招宮中

宮內省

本邦有內大臣及中務卿中務省爲八省第一

露　宮內卿爲諸卿第一兼領帝領事務

佛　初國務卿兼宮內卿後宮內卿美術卿

塊　外務卿兼宮內卿

淸　有大師大傅大保內大臣御前大臣

宗廟陸墓事務及修繕建築

賞勳局　爵位局　待詔局

神官　敎導職

修史館　博覽會　博愛局　書籍館

式部寮

侍補　侍從　九等出仕　侍講

官國幣社及勅願佛寺泉涌寺般舟院

勵香問詰　拜命異同　露國有待免職

宮中祇候　露國以貴族幣侍從名

室內省定額及御手許金

貴族權利對　議院　裁判所

貴族保護

有爵位及勳勞者對遇

御厩內膳內藏御服職員

宮內官員俸給　侍臣宜改年俸

往古年中行事　中古年中行事

和歌所

現今宮內諸規則

宮內職制幷章程

御寫眞廣賣免許

皇族大臣妻叙位

各府縣獻貢

離宮　甲州　上州

御祖宗始改メテ御神祭ニ付東西京ニ廟所ヲ建テ人民ニ參拜ヲ許可ス

國憲編纂起源

儀式

祭吉凶軍賓嘉

恒例　臨時

雜件

京都ヲ西京ト改稱ス　南京奈良　北京札幌

人民ヨリ皇族ニ對スル敬禮

國旗祝日而已揭揚シ神武及近代諸帝祭日ハ歌舞音曲停止

皇族大臣參議各省卿病氣旅行發著御尋使

東京御陵兆域　皇族墓地治定

豐島岡ト諸陵墓御取扱區別

皇居表門諸人通行差留

御寫眞販賣許否

諸學校工場開業臨御預定

行幸行啓ノ節皇族禮節

帝室及皇族婚禮式

皇后入內式　入內直ニ皇后ト稱ス或ハ其前女御ト稱ス

儀式或遊行ノ行幸ト鹵簿區別

式部寮關係儀式ト宮內ノ內儀式ト區別

勅奏任官及何位何勳等以上妻內謁見

皇族勅任官何位勳何等以上凶事儀仗兵被差遣

御直宮ト親王諸王禮遇

隨身兵仗古制參酌

勅使體裁

內宴儀式

遊幸典式

行幸沿道旌表賑恤典式

一夫一婦ノ主義異同ニ付侍御局有無侍御局名稱位階及他女官ト常務區別嫡出第一皇子女ト庶出皇子女ト接待如何

庶出皇子女皇后御養子如何

皇后御養子ト被定ルハ皇后及皇子女御齢凡幾歳以上ナルヘキ哉

庶出皇子大統繼承ノ後其國母ニ准后宣下如何

御直宮不及宣下直ニ親王內親王ト被稱ニ付テハ后後其他皇族ニ親王宣下振合如何

聖上兩皇后宮詩歌下賜

女房奉書及文體

皇太后宮ニテ能興行皇族勅任官華族夫妻召集

伺候華族侍從列ニ被如何

諸規取調所覺書

昨十五年八月八日岩倉殿へ參上、右府內談ニハ編纂取調ノ義追々延引致シ、到底伊地知着手致サズ候ハヾ、鄕輔一人誰カ擔當取調ベ候樣足周旋候テハ如何、香川大書記官ハ勤王篤志ノ者ニ候間、之ヲ加ヘテ更ニ着手候方如何ト被申候ニ付、小臣宮內出仕ハ伊地知ノ推擧ニ因リ候歟ニ承リ、且拜命ノ日宮內卿德大寺殿ヨリ勤方ノ義ハ伊地知ノ指圖ヲ可申受旨口達モ有之候事ニテ、今更伊地知ノ著手無之處ヨリ、他人ヲ周施スベキノ事ハ中心其安カラザル而已ナラズ不當ト存ジ候間、直チニ宮內卿ニ御下命有之候ハヾ、小臣ハ如何樣トモ從事臣仕旨申シ候。右府答テ、是迄宮中ノ事餘計ノ世話ヲ致シ候嫌忌モ有之候間足下ヲ勞スルナリ。然シ右等ノ事情モ有之候ハヾ猶熟考可致ト、其後內閣ニ於テ面會前日相談ノ事ハ不遠取運ビ可申旨示談（十一月二十九日）右ニ付一日（十二月一日）伊地知へ參リ、右府云々相談シ、一ケ條取調ベ候テハ如何ト陳述候處、伊地知曰、彼ノ憲法規則ト申ス條目ヲ熟覽候處、實ハ誰人ノ書キ綴リタルモノカ逐條首尾中々混雜ノモノニテ、國下聖人復タ出ルモ萬世ノ成法ト相成リ候樣取調ハ無覺束、到底如何ノ無精神ノ取調ハ一ケ條タリトモ著手致シタク之ナシト聲ヲ呑デ切言アリ。而シテ其最モ條目ノ重キモノヲ撮取シニ口演アリ、余筆ヲ取テ記載シ別紙ニ備フ。仍テ篤ト其意底ヲ考察スルニ、同氏參議兼

議長タリシ節、國憲取調ヲ兩度マデ御委任相成候テ、切角着手ノ時ニ際シ、忽チ左院廢止隨テ參議辭職相成候ヘバ、今更ニ宮内省御用掛ノ身ヲ以テ憲法編纂ハ職不相當ノ事ニテ、内閣ヨリ十分權力アル重臣　帝室ニ入テ擔任致スベキハ當然トノ語氣ニ相顯レ候ニ付、翌十六年一月八日德大寺宮内卿ヲ尋ネ顚末ヲ篤ト申演ヘ候處、始テ前後ノ事情ヲ了解セラレ、左院時代着手有之候ハヾ元老院創立ノ際ニ議長被命候テ、順序ヲ逐テ取調完結可相成ハ當然ノ處、其運ビニ不相成シテ經過候テハ、同人精發揮ノ機會ヲ來サズ、今日ノ成行ハ無據事情委曲明瞭セリ、此事最初ニ承知候ハヾ無理ナル望モ掛ケザリシ、但シ非常ノ偉人ユヘ破格ノ御優待ニテ、國家ノ大事ニハ御推問モ可有之、尋常ノ御取扱トハ異ナリ候間、此旨承知可致ト懇篤ノ演說ナリ。仍テ當夏ハ伊藤參議モ歸朝可相成、其節愚見可申陳ト宮中卿ニ申シ、憲法起源ノ一冊呈奏ス。

伊地知一等出仕口演筆記

國號　國號ノ如キハ海中ニ始テ島嶼ヲ見出シ候トキ其名號ヲ拜ヒ、其稱呼ヲ定ル等ノ事アルベシ、我ガ

皇國上古ハ種々ノ國號モ之アリシニ、中古日本ノ稱號ヲ御確定相成リタレバ、今更ラ何ヲ苦シンデ國號ヲ取リ調ベニ及ブベキ、自稱ハ日本ト稱シ、外國對等ノ禮ニハ大日本ト稱スルハ現行相當ナリ。

國體　天祖ノ訓話ニ此豐葦原ハ吾子孫可王之地天壤無窮云々　此訓話ハ萬世不拔ノ　皇基ナリ。他ノ訓話ハ國體ノ基本ト爲スニ足ラズ、但シ其國民ヲ治ムル政體ハ君主專制ナリ。君民同治ナリ。共和政治ヲ除クノ外ハ國民サヘ治スレバ何レナリトモ御差シ支ヘハ有之マジ。

三種神器　右等ハ取調樣モアルマジ

太上天皇並法皇　仙洞ニ被爲入候得バ太上天皇尊號贈上ハ勿論ナリ。法皇ノ事ハ院號サヘ御廢止ノ今日ナレバ釋民ニ出ル法號等ハ皇室ニ於テ口ヲ閉ヂテ可ナリ。

卽位踐祚宣誓儀式　右等ハ從前ノ成規可有之

尊號　天皇又ハ天子ト尊稱シ奉リ、又ハ各國對等ノ公文式ハ皇帝ト稱謂ヲ定メ候得バ其他ハ不用ナリ。

改元　神武紀元何千何百年モ民間通用ニハ少シク難澁ナリ。漢土モ明代ヨリ一代一元ノ制ヲ定メ今日淸朝之ニ沿襲ス其制頗ル倣フベシ。　御維新後一代一元ノ姿ナレバ此レニテ當然ナルベシ。御一代數度ノ改元ハ已ニ無用ナルベシ。

諡號　近世ハ白河家ニ御委任ノ樣ニ覺ユ、御維新後ハ內閣ニテ御選定當然ナリ。

皇上神聖不可侵云々　西洋各國ハ君主ノ組織各種類有之候得バ憲法ノ首ニ右等ノ語ヲ揭出スル一理アルベシ。

皇國ノ臣民ハ如此ノ言ハ口ヨリ吐キ出スモ忌マ忌マシキコトナリ。

國政責任　諸省卿ノ上ニ參議アリ、參議ノ上ニ大臣アリ、大臣ノ上ニ太政大臣アリ其上ニ聖天子被爲在、辱クモ萬機御親裁被爲在候得バ國政ノ責任ハ恐レ多クモ聖天子ノ御躬ニ有之ハ勿論トス。故ニ古ヨリ年凶ナレバ御膳ヲ減ジテ田租ヲ免ゼラレ、寒夜ニハ御衣ヲ脫シテ民ノ疾苦ヲ恤マセラレタル事ハ史冊ニ載セテ昭々タリ。若シ天皇ニ御任ナキ時ハ　帝德ヲ御治メ被遊ニモ及バザルナリ。故ニ自古太政大臣アリ　帝德ヲ輔佐シ奉リテ陰陽ヲ燮理スルハ我固有ノ國體ナリ。

法律確定布告立法院開閉　右等ノ條件ハ何ノ意義ナルヤ、不確定ノ法律ハ布告モ相成ルマジ。且又立法院ト稱スルモノナシ。

陸海軍總統便宜指揮　兵馬ヲ掌握スルハ素ヨリ皇帝ノ權ナリ。大將ト雖モ　帝命ヲ待タズシテ兵馬ヲ指揮スルノ權ナシ。

諸官吏任免講和約結　今已ニ官吏ヲ勅奏判三等ニ區別シテ勅授奏授ノ品等アリ、講和結約ハ國家ノ大事ナリ、臨機ニ特命使節ヲ派遣スルモ其大權ハ平日聖天子ノ御掌握ニ在ルナリ。

大赦特赦　右件ハ古來ヨリ漢土ニテモ議論有之、謀叛又ハ徒黨ヲ企ルカ又ハ殺人等ノ事ニ到テハ大赦ヲ爲サズ。御維新ノ際ニ大赦ヲ行フ如キハ我邦千載一時ニシテ、例ニモ不成コトユヘ妨ナシ。今後如此ノ大赦ヲ行フテハ御政體相立ツマジ。特赦ハ格別ノ事ナリ。

貨幣聖照　已ニ貨幣一定ノ彫刻アリ、何ゾ歐洲ニ模倣シテ聖照ヲ彫ルニ及バン。

女帝　男院女院

皇國帝系ハ男統一系ナル故ニ萬世無窮　皇統連綿セリ。若シ女統ヲ立ツ、皇統直チニ他系ニ移ル、此ニ是ヲ皇統ヲ滅絕スルト云フ。

帝室不動產　帝室ノ御歲入ヲ議セン爲メ帝俸ナドト稱シテ御入用ヲ限ルハ、朝廷ヨリ自ラ縮ムルナリ。維新ノ後人民ヨリ上ニ向ヒ朝廷ヲ縮ムル事ハ一度モ之レナシ、皆朝廷ヨリ縮メテ此ニ到ルナリ。或ハ言フ關八州（現時ノ稱號ニ就テ）ヲ以テ五畿內等ニ準ジ八州ノ査入ヲ以テ帝室ノ御歲俸ニ充テ、之ヲ帝室ノ御所有ナドヽ取極ムルノ說モアルヨシ、若シ右等ノ說ヲ實用セシメバ　帝德幾分ノ御分量ヲ節限シテ凶年飢歲ノ減租ノ　聖詔モ御所有ノ畿田ノミニ限リテ　聖澤ノ及ブ所全國ニ普及セザルベシ古ヘ仁德帝ノ頃ハ民ノ富ハ朕ノ富ナリト仰セラレテ減租ノ　聖詔モ仰出サレシ事ヲ千餘年末

憲法資料 下巻 終

帝王ノ龜鑑ト相成リ、目出度事ト仰ギ尊ミ、明治ノ御代ヨリハ帝倭ト申スモノ定リテ御所有外ノ地ハ縱令凶年アリトモ御撫恤不相成姿ニ御縮ミ被成候義ハ祖宗ノ御國體ニ對シ非常時御毀損ヲ來タシ、御不德御不孝ヲ被遊候事ニ相成リ、誠ニ以恐懼千萬言語ヲ絕シ奉ル次第ナリ。左レバ　帝室御歲入ハ是迄通リニ國民ヨリ田租ノ幾分ヲ貢納致サセ、帝室ノ經費ニ充テラレ候ハバ、則萬世ノ御祖法ニ背カレズ、誠ニ以テ目出度御事ナリ。但シ額ノ多寡ハ幾重ニモ御吟味相成リ、非常ハ非常、常額ハ常額ト區分ヲ立テ候テ、縱令バ皇居御建築皇城御修繕等ハ卽チ臨時國庫ヨリ支辨致スベキハ無論、猶ホ國ヲ守ルノ陸海軍費ハ國庫ヨリ支出シテ　皇帝ヲ安ジ奉ル、皇居費用ハ國庫ヨリ支出セザルノ理ナシ。此理ヲ詳明ニスルハ國家憲法ノ第一目的ナルベシ。

右條件重立候廉ヲ篤ト御吟味ノ上ニ御定メ被成候得バ、其他小細條件ハ幾度御改定相成候トモ差支ヘ有之間敷、唯我國固有ノ本體ヲ根元トシテ憲法御取調相成候得バ、自然善良ノ憲法モ成就スベシ。若シ然ラズシテ徒ラニ之ヲ海外諸國ニ求ントス、之ヲ無精神ノ憲法トス。

明治十五年十二月一日

諸規取調所御用掛

宮島誠一郎　筆記

憲法資料　下巻

人名索引

《イ》

伊東巳代治　七〇、二八七、二九五、二九六、三一七、
井上　毅　九八、一一三、一三一、一五七、一八八、三二三、
イサベラ　二一七、
伊藤博文　二三〇、二九五、四四三、四七四、四七五、四七六、四九六、
伊丹重賢　四〇四、四七五、
伊集院兼寛　四三八、
岩村通俊　四三八、
岩下方平　四三八、
岩倉具視　四四三、四四四、四四五、四六六、四六八、四七〇、四七一、四七五、四八三、四九五、
伊知地正治　四四五、四四七、四五八、四五九、四六三、四六五、四六六、四六九、四七四、四七五、四八〇、四九五、四九六、

板垣退助　四四五、四四八、四五〇、四五一、四五二、四五九、四六七、四六八、四七一、四七三、
井上　馨　四五七、四五九、四六五、
井田　四七八、
伊藤　四七八、

《ロ》

ロルド、チャーサム　九、
ロルド、ロッキン　二、三、
ロッキンハム　三〇、
ロ　ー　ン　三七、一三一、一三五、一五〇、
ロエスレル　九九、一一三、一二九、一三九、一三五、一三七、一五〇、一五一、一五五、一七七、一七八、一八七、一八八、一九四、二〇〇、二九五、二九六、二九九、三一七、三二八、三三二、三三三、三三一、三四四、
ロシ　イン　一八九、
ロベスピール　二三一、

《ハ》

パ　ー　ク　八、九、一〇、一二、一三、
ハロルト、メスバレー　一八、

パリー　二一〇、
林友幸　四三八、

《ホ》

ポーランド　二、
細川潤次郎　三八四、
本田　四七五、

《ヘ》

ヘンリー三世　一、八、
ヘンリー五世　二、五四、
ヘンリー六世　二、五四、
ヘンリー七世　二、五四、
ヘンリー八世　二、六二、
ヘンリー四世　五四、
ベンサム　一〇〇、
ペオツル　一四二、

《ト》

ドン、カーロス　二一七、
徳大寺實則　四五〇、四九五、四九六、

《チ》

チヤーレス一世　二、
チヤーレス二世　二、三、四、五、
チエール　二一〇、三一四、

《リ》

リチヤード二世　二、五四、
リツチモンド　一〇、
リヨンネ　七二、九六、一四二、一九一、

《ヌ》

ヌイエル　一八五、

《ル》

ルイ　三七、五六、

《ヲ》

大木喬任　三八四、四五一、四五二、四七三、四七四、
大久保一翁　三九八、四三七、四三八、
大給恒　三九八、三九九、四〇〇、四〇二、四〇三、四〇四、
四〇七、四〇八、四〇九、四一〇、四一一、四一二、四一七
四一八、四一九、四二二、四二三、四二四、四二八、四二九、
四三〇、四三一、四三二、四三三、四三四、四三五、四三六、
四三七、
大久保利通　四四五、四四七、四五一、四五六、四六六、四六七、
四六八、四六九、四七〇、四七一、四七二、四七三、四七四、
四七五、四七八、
大隈重信　四五一、四五二、四六五、四六八、四七三、四七四、

《ワ》

渡邊驥　四三九、
渡邊昇　四四〇、
和田八之進　四五〇、

《カ》

カーラント　二一〇、
カブール　二一五、
ガリバルヂー　二一五、
カステラル　二一七、
河島醇　二五六、
神田孝平　三九八、三九九、四〇〇、四〇一、四〇二、四〇六、
四〇七、四〇八、四一二、四一三、四一五、四一六、四二〇、
四二一、四二三、四二五、四二六、四二八、四三三、四三七、
河田景與　四〇四、
河瀬眞孝　四三八、
勝安房　四七四、
香川敬三　四九五、

《ヨ》

吉井友實　四三八、

《タ》

ターフエ　二一三、
玉乃世履　四三八、
谷鐵臣　四五九、四六三、
高崎　四七五、

《ソ》

ソーレー　五、
副島種臣　四七一、四七三、

《ツ》

鶴田皓　四三八、
津田出　四三八、
津田眞道　四三九、

《ネ》
ネツケル　一三九、三一〇、
《ナ》
ナポレオン三世　三六、一三七、一三八、
ナポレオン一世　一三五、一三九、二一五、二九八、三〇四、三〇九、三一二、
中村弘毅　四三八、
《ラ》
ラーバンド　一四五、一八五、三〇四、
ラブエリエ　三〇四、
ライヒラススタイン　二一四、
《ウ》
ウキリヤム三世　二、八、
ウキリヤム王　三、五、
ウキルキース　九、
ウキリヤム、ヒツト　二、
ウキリヤム四世　一四、一五、三、
ウエリントン　一四、六一、
ウキクトリア女皇　一五、三六、五八、一九七、
ウルブリヒ　一八五、一八七、一九二、
ウキルヘルム　三〇一、
《ノ》
ノートン　一〇、
野津道貫　四七五、
《ク》
グレー　一四、
クリスチヤン　五六、
グレビ　二一〇、
クリスピー　二一六、
クリスチナ　二一七、
グラント　二一九、
クルメッキ　二三〇、二五一、
黒田清隆　二五二、二五七、四五七、
黒田清綱　四三八、
楠本正隆　四三八、
楠田英世　四三九、
《ヤ》
安場保和　四三九、
山田顯義　四七八、
山縣有朋　四七八、
《マ》
マイエル　一九二、三二九、
マクマホン　二一〇、
マニング　二一五、
マツヂニ　二一五、
松岡時敏　四六五、四七五、
《ケ》
ケント　二五、三八、
ケンブリツチ女王　五六、
ケンブリツチ　五六、
《フ》
藤波言忠　一、三、
フオックス　一〇、
ブーランゼー　二一、
フエルヂナンド七世　二七、
福羽美静　三八四、
福岡孝弟　三九七、四一〇、四一八、四一九、四二三、四二六、四二七、四三〇、四三三、四三五、四三八、四四三、
《コ》
コンノート　五六、
コロニン　二一五、
後藤象二郎　四四五、四四八、四五一、四五三、四五八、四五九、四六五、四六九、四七一、四七四、
河野敏鎌　四七八、
《エ》
エドワルド二世　二、
エドワルド三世　五四、五五、
エドワルド四世　五四、
エヂンバラ公　五六、
エルスキンメイ　三三七、
エストルプ　二八五、

江藤新平　四四七、四五一、四五二、四七三、四七四、
《テ》
テック女公　五七、
寺島宗則　四七四、四七五、四七六、
《ア》
アン　三、四、六、一六、一九、
アッテントン　八、
アメリー　七、
アルバネ女公　五七、
アルバルト　一六、三五、六三、
アルホンス　二七、
《サ》
佐々木高行　四〇四、
齋藤利行　四三八、
西郷隆盛　四四五、四五〇、四五一、四五二、四五九、四六七、四六八、四七〇、四七一、四七三、四七四、
三條實美　四五六、四六三、四七一、四七二、四七三、四七六、
《キ》
木戸孝允　四四五、四五一、四五六、四六七、四六八、四七〇、四七一、
桐野利秋　四七二、四七四、
《メ》
メクレンボルグ女公　五六、
《ミ》
ミルトン　二八、
箕作麒祥　三九七、四〇一、四〇七、四〇九、四一四、四三〇、四三一、四三五、四三七、四三九、四四〇、四四一、四四四、四四五、
水本成美　四三九、
宮島誠一郎　四四三、四四四、四四七、四五八、四六六、四六七、四七〇、四七二、四八三、五〇〇、
《シ》
ジエームス一世　二、
ジエームス二世　三、五、
ジョージ一世　六、三〇一、
ジョージ二世　六、
ジョージ三世　六、八、一三、一四、一七、一九、二一、二五、
ジョージ四世　一三、一七、二一、
シユーナム　一八、
シユールチエ　一八五、三五九、
柴原和　四三八、
島津久光　四五〇、四七八、
澁澤榮一　四六五、
篠原國幹　四七三、四七四、
《ヒ》
ピット　一八、
ビヤトリヤス　三八、四四、五六、
ビスマルク　一三八、一四八、二〇四、二〇五、二〇六、三〇三、三一〇、三二六、四六七、
ピーモント　二一五、
東久世通禧　三九八、三九九、四〇〇、四〇一、四〇三、四〇六、四〇七、四〇八、四〇九、四一〇、四一一、四一二、四一三、四一七、四一八、四一九、四二三、四二四、四二八、
東伏見宮　四二九、四三〇、四三一、四三二、四三四、四三六、四三七、四七八、
《モ》
モス　セ　一六五、一六九、一七八、一八三、一八八、一九〇、
モントペシエル　二一七、
《セ》
ゼローム　二一〇、
ゼツフエルソン　二一八、
《ス》
スタイン　二五二、二五七、二五八、二八七、二九四、

昭和十年八月十日印刷
昭和十年八月十五日發行

【非賣品】

校訂者　平塚篤
東京市杉並區上荻窪九六三

發行者　平塚篤
東京市芝區田村町二ノ六ノ五

印刷者　太田勝三
東京市麹町區內幸町一ノ三（大阪ビル內）

發行所　祕書類纂刊行會
電話銀座五一八一—九番

祕憲書法下類資卷纂料

不許複製

朝日堂印刷所印刷

B-16

課
CZ.5.14
…公考查局

B-16

課
C2.5.14
工業技術局